

金沢城史料叢書 44

石川県金沢城調査研究所設立 20 周年記念

金沢城出土品図録

—モノからみた金沢城—



はじめに

金沢城跡の発掘調査は、昭和 43・44 年（1968・69）、金沢大学が組織した、金沢城学術調査委員会を中心に行われたのが始まりです。その後、金沢大学考古学研究室による大学敷地内の調査、石川県立埋蔵文化財センターによる道路整備にかかる調査を経て、平成 9 年度（1997）には、石川県が進める金沢城公園整備事業とともに発掘調査が始まりました。

平成 14 年度（2002）からは、金沢城研究調査室（平成 19 年度（2007）に金沢城調査研究所に改組）が主体となり、金沢城の学術的価値を一層明らかにするため、本丸などの確認調査にも取り組んできました。この間、瓦や陶磁器をはじめ、木製品、金属製品、石製品など多種多様な遺物が出土しています。

石川県金沢城調査研究所の設立 20 周年の節目に際し、これまで出土した代表的な遺物を取り上げ、金沢城・城下町の形成、城の建築と土木、生活や勤務などとの関わりを軸に、その特徴を解説する「金沢城出土品図録—モノでみる金沢城—」を刊行することとしました。本図録が、金沢城の魅力を一層引き出す一助となれば幸いです。

石川県金沢城調査研究所



史跡金沢城跡全景

例　言

- 1 本書は、金沢城調査研究事業の一環である金沢城資料集成事業の成果をもとに、代表的な金沢城跡出土品についてカラー写真図版で紹介したもので、金沢城調査研究所設立 20 周年記念事業のひとつとして刊行した。
- 2 本書の作成は、滝川重徳（担当課長）、荒木麻理子（調査研究専門員）が担当し、笠松一美（非常勤職員）が補助した。
- 3 掲載資料のうち、所蔵の記載のないものは、石川県金沢城調査研究所で保管している。
- 4 出土品の掲載報告書等文献・掲載番号・寸法等については、巻末の表・参考文献に示した。
- 5 本書の作成に関し、以下の機関・個人から協力を賜った（敬称略）。
金沢市立玉川図書館　金沢大学資料館　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター　横山隆昭

目 次

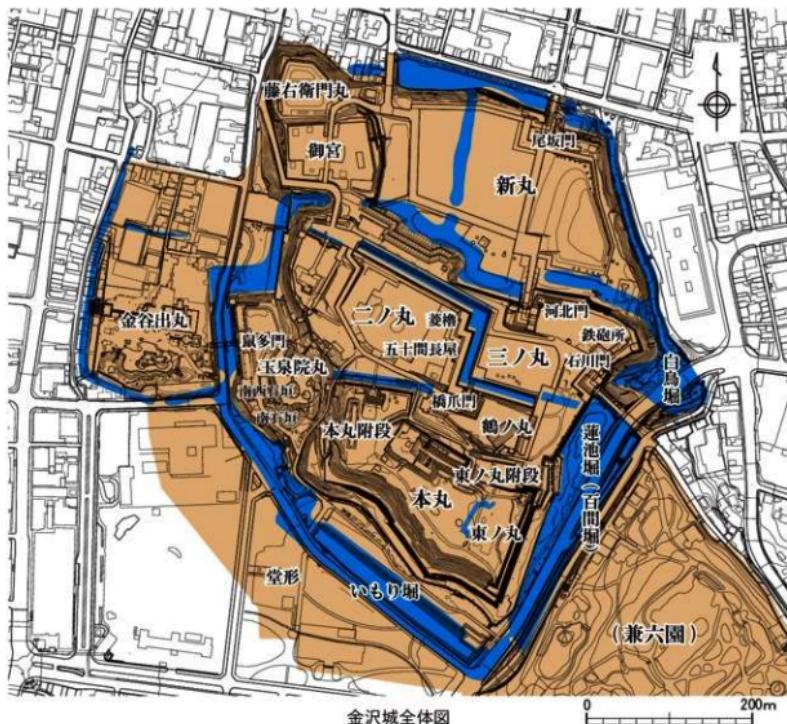
はじめに

例言

目次

金沢城全体図、主要調査地点一覧

金沢城・城下町形成前史	5
寺院（墓地）から寺内町・城下町へ	6
城普請とモノ－建築・土木関係の出土品－	11
瓦	19
建築部材と工具・金具	55
石垣普請の工具・金具	60
作事・普請と祈り	63
城の暮らし・勤めとモノ－生活・勤務に関する出土品－	67
城内の暮らし－御殿と武家屋敷の出土品－	72
城内の勤め－役所などの出土品－	85
御城中毫分基絵図、金沢城略年表	95
掲載資料一覧	96
参考文献	99



金沢城全体図

0 200m

主要調査地点一覧

地点	調査主体	事業	調査年度
新丸	(財)県埋蔵文化財センター	公園整備	1999,2000
御宮・藤右衛門丸	(財)県埋蔵文化財センター	公園整備	2000
玉泉院丸南西石垣	金沢城研究調査室・調査研究所	公園整備	2005-07
玉泉院丸庭園	金沢城研究調査室	公園整備	2008-12
玉泉院丸南石垣	金沢城研究調査室	公園整備	2013
鼠門・鼠門門脇	金沢城研究調査室	公園整備	2014-18
鉄砲所	(財)県埋蔵文化財センター	公園整備	1998
河北門	(財)県埋蔵文化財センター	公園整備	2000
	金沢城研究調査室・調査研究所	公園整備	2006-08
二ノ丸	金沢城字画調査委員会	学術調査等	1968-69
	県立埋蔵文化財センター・(財)県埋蔵文化財センター	公園整備	1997-99
	金沢城調査研究所	公園整備	2020-
本丸・本丸附段等	金沢城研究調査室・調査研究所	調査研究	2002-08, 14
いもり堀	(財)県埋蔵文化財センター	公園整備	1998,2000
	金沢城研究調査室・調査研究所	公園整備	2003-04, 06-09
蓮池堀・白鳥堀	県立埋蔵文化財センター	道路整備	1992-94
堂形	(財)県埋蔵文化財センター	都心地区整備	2003-04, 07-08, 12

金沢城・城下町形成前史

解説

■ 寺院（墓地）から寺内町・城下町へ

金沢城は、天文 15 年（1546）に創建された一向一揆・本願寺勢力の拠点、金沢御堂（金沢御坊・尾山御坊）を前身とし、天正 8 年（1580）に金沢御堂を攻略した織田信長の家臣佐久間盛政により築城されたと伝わる。同 11 年（1583）には前田利家が入城し、以後、明治初年に至るまで、加賀・能登・越中三か国にまたがる領国を形成した、加賀藩前田氏の本城だった。

城内の発掘調査では、城郭形成以前の状況は断片的にしか分かっていない。とくに、金沢御堂の主要部と推定される本丸一帯では、その時代に遡る明確な遺構は未検出である。これは、発掘範囲が小面積であることに加え、佐久間氏・前田氏の城郭整備により改変を受けたためとも考えられる。

その一方、本丸に伝わる石塔の塔身や御宮などで出土した宝塔などの部材〔文 38・47・48〕は、金沢御堂をさらにさかのぼる寺院・墓地の存在をうかがわせる。御宮の北に隣接する城域北端の藤右衛門丸では、下部の造成土に火葬骨が混在し、最下層の地山面では火葬



新丸第 2 次調査区〔文 22〕

に関連するとみられる遺構が見つかっている。

また、新丸・白鳥堀下層では、寺内町から初期金沢城下町にかけての町屋や金属加工に関する遺構・遺物が見つかっている。中国磁器や国産の瀬戸・美濃陶器を主体とする陶磁器群は、当時の暮らしの一端を示すとともに、戦国期から近世初期の年代の指標としても重要である。^{ホウイツ}輪の羽口や取鍋は、鍛冶や鉄物を行う際の部材や道具である。銅や鉄の素材などとともに、発展期の都市の活況を示唆している。

町屋や金属加工工房は、1600 年頃を境に、城の中に取り込まれた。これら遺構と遺物は、金沢城下町の形成と連動して進められた金沢城の拡張を考える上で、重要な資料である。



新丸から御宮・藤右衛門丸を望む



白鳥堀調査区下層遺構面出土陶磁器

寺院（墓地）から寺内町・城下町へ

石塔と火葬骨

城内各所の発掘調査で、仏塔（五輪塔、宝塔）など信仰に関連した石造物が廃棄されているのを確認した。



1. 石造物 金沢大学資料館蔵（写真提供：金沢大学資料館）

本丸、御宮

中世の石造物で、石材はいずれも凝灰岩である。金沢御堂以前の寺院や墓地の存在が想定される。



2. 石造物

本丸附段

宝塔等の相輪諸花部分であろう。
被熱していて、割れ口に溶融鉛が付着している。



3. 石造物

菱檜

五輪塔の水輪。火山疊凝灰岩製で、側面の柄状の孔の存在から、灯籠の火袋等への転用を目的に再加工される途中で廃棄されたとみられる。

藤右衛門丸では、整地土や土坑から灰や炭化物、焼けた人骨が出土しており、郭を造成する以前の火葬施設に関連すると考えられる。

出土人骨について、部位の同定とその特徴についての分析を行ったところ、「軟部が付着した状態で、800度以上の高温で焼かれたと思われる」との所見を得ており、そのことも火葬関連遺構の存在を示すものと考えられる。



4. 藤右衛門丸下層出土火葬骨

藤右衛門丸

同定した部位には、頭蓋骨、肩甲骨、上腕骨、舟状骨、末節骨、大腿骨、脛骨などがある。



茶罈遺構

新丸・白鳥堀下層の遺物

新丸尾坂門付近や白鳥堀下層の調査では、城に取り込まれる以前の屋敷の区画や鍛冶関連遺構を確認し、陶磁器や金属加工関連遺物が出土した。出土陶磁器の組成は、九州の肥前地方（佐賀・長崎県）で生産された肥前陶器（唐津焼）が流行しはじめる17世紀初頭より古い様相を示し、中国磁器や瀬戸・美濃陶器が主体となっている。



瀬戸・美濃陶器 天目茶碗、皿

朝鮮陶器 瓶、碗



中国磁器 碗、杯、皿

5. 新丸下層出土陶磁器

新丸

中国磁器や瀬戸・美濃陶器が主体となっている。



瀬戸・美濃陶器



中国磁器

6. 白鳥堀下層出土陶磁器

白鳥堀

輸入陶磁器は中国磁器が主体で、
瀬戸・美濃陶器は天目茶碗や茶入
などの茶陶の占める割合が高い。



轆羽口



鉄滓

7. 金属加工関連遺物

新丸・白鳥堀下層

鉄滓は鉄製品を製作した際に生じた不純物の塊。
取銅は溶かした金属を入れ、鋳型に流し込む容器
で、白鳥堀下層出土のものには把手が見られた。
轆は火炉に風を送る装置で、羽口は送風管となる
筒状の土製品である。

城普請とモノ—建築・土木関係の出土品—

解説

■ 普請と作事

近世城郭の造営に際しては、自然地形を生かしつつ、削平や造成といった大規模な土木工事（普請）によって曲輪や堀・石垣などがつくられ、さらにこれらを基盤に、天守や御殿、櫓や門、役所など多くの建築物が建設された（作事）。

金沢城では天正 14 年（1586）に天守が創建されており、この時点ですでに城郭としての威容はいったんは整ったとみられるが、文禄元年（1592）から本丸・東ノ丸の石垣構築が開始されるなど、城づくりは止むことなく継続された。

元和 6 年（1620）の本丸火災、城下も含め



東ノ丸北（丑寅橹下）石垣



石川門

て被災した寛永 8 年の大火（1631）を経て、金沢城は二ノ丸の御殿空間を中心とした構造に変容した。寛永以後は、城郭の形状を大きく変える普請は行われなくなったが、石垣の修築については、寛文（1661～73）・宝暦～安永（1751～81）・享和～文化（1801～18）等、近世を通じて行われた。また作事については、宝暦 9 年（1759）の大火・文化 5 年（1808）の二ノ丸火災後の再建など、御殿を主とした増築・改築が頻繁に行われた。

現在金沢城内に残る石川門・三十間長屋・金沢城土蔵（鶴丸倉庫）は、いずれも近世後期に再建されたものである。

ここでは、これら建築や土木工事に関する出土品を紹介する。

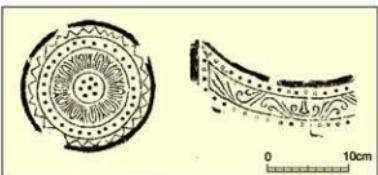
■ 瓦—近世城郭の象徴—

【金沢城瓦の出現まで】

出土した建築部材のなかで、大多数を占めるのは瓦である。

瓦は、古代においては主に寺院や官衙施設に用いられた。金沢付近では、市域北東の觀法寺窯跡群や同南東の末窯跡群で、7 世紀後半～8 世紀代の製品の生産が確認されている。

後の城下中心部に相当する広坂遺跡では、これらの生産地から供給された瓦が出土して



広坂遺跡出土軒丸瓦・軒平瓦

金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2005
『石川県金沢市広坂遺跡（1丁目）II（古代・中世編・測量図編2）』
第 105 図 56・第 114 図 138 を転載

おり、当地に寺院（広坂廃寺）が営まれたと考えられている。しかし古代瓦の系譜は、加賀・能登一帯を含め〔文 37〕、11世紀代に途絶えてしまう。

中世においても、能登北部の南黒丸遺跡でわずかに14世紀頃の事例が知られる他〔文24〕、出土資料に乏しく、瓦生産は低調であった。

この状況は、16世紀末期に至って一変する。織田信長・豊臣秀吉を頂点とする織豊政権の形成とともに、全国的に、石垣、礎石建物、それに瓦を備えた城郭が発達していった。金沢城もまた織豊系城郭として整備され、その重要な要素として、主要な建物の屋根を瓦が飾つたのである。

【材質】

瓦の材質は、出土事例としては粘土製（焼き物）が大多数で、その他に石製・金属製がある。



焼瓦出土状況（本丸附段 2004-01SK11）〔文 2〕

粘土瓦は、古代・中世以来一般的な、素焼き製品を煙で焼し炭素を吸着させた焼瓦と、それよりも硬質な陶器瓦に大別される。焼瓦には金箔が貼られた金箔瓦が含まれる。金沢城出土の陶器瓦は、赤褐色～黒褐色の釉薬ないし鉄分を多く含む土を薄めた水溶液が塗布されている（釉薬瓦・越前赤瓦）。

石瓦は、越前（現・福井県）地域に産出する凝灰岩・笏谷石から作られたものである。焼瓦に比べて、全体に重厚・長大な作りである。福井県坂井市丸岡城の天守や福井城下町等、越前国内での使用・出土は多く知られているが、越前以外での流通は顕著ではなく、金沢城は希少な事例に属する。ただし出土地点は北西部の御宮や南側の外堀（いもり堀）を越えた堂形などに限定され、全体量は少ない。

金属瓦には、鉛瓦と銅瓦がある。粘土瓦や石瓦とは異なり、木製の下地に金属板を被せ



釉薬瓦出土状況（玉泉院丸南西石垣）〔文 29〕



焼瓦出土状況（東ノ丸附段 2002-7 地点）〔文 2〕



石瓦出土状況（御宮 NS2 区）〔文 14〕

て瓦屋根状に仕立てたものである。鉛瓦は、現存する石川門や三十間長屋に葺かれており、海鼠壁等とともに金沢城の特徴的な建物景観を形成している。ただし出土事例は少ない。金属瓦は損傷しても容易に廃棄されることはなく、回収して再利用されるためである。

銅瓦については、近世後期の文献史料によると、御殿の格式の高い主要部に用いられており、最高級の屋根葺材だったことが明らかである。しかし、現在までのところそれと認識できる確実な出土資料は確認されていない。

このように金沢城では、多様な材質の瓦が、流行時期や使用箇所に違いを持ちつつ存在していた。なお屋根材としては、他に柿葺や檜皮葺など、植物質素材を用いたものがある。

【形状・種類】

16世紀末期から18世紀代まで、屋根瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦等で構成される本瓦葺（本葺）であった。19世紀代に入ると二ノ丸御殿等により軽量な棟瓦が採用されたが、土壌や土蔵等、引き続き本瓦葺が用いられた箇所も多かった。なお現存する鉛瓦の大半は本葺である。

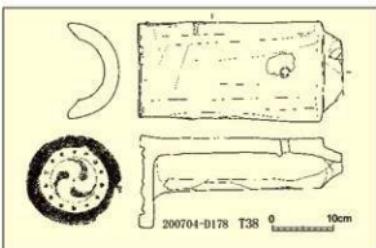
このうち軒丸瓦の瓦当文は、巴文と前田家の家紋である梅鉢文のみが知られている。軒平瓦の文様は、中心飾りの両脇に唐草が配置されるパターンが主体で、中心飾りは桐文・三葉文・花文・半葉文・梅鉢文・巴文等がある。鉛瓦の軒平文様はやや特異で、中心にS字ないし逆S字状の唐草を有する。

軒棟瓦には、軒丸部（小丸）を備えたものと、これを欠く鎌棟瓦があり、後者の方が多い。軒平部の文様は、大まかには軒平瓦と同様の構成で、中心飾りには玉抱文や菊文等がある。

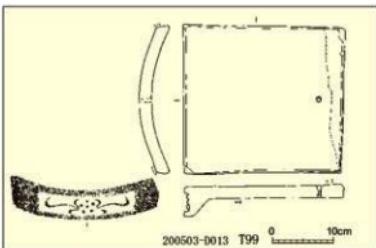
燐瓦は、初期のものほど重厚で、時期が下ると薄手になる傾向がある。とくに丸瓦の裏



本葺（本瓦葺）（石川門・鉛瓦）



軒丸瓦実測図（河北門）【文3】



軒平瓦実測図（玉泉院丸南西石垣）【文29】



棟瓦葺（石川門右方太鼓櫓・釉薬瓦）



腰瓦と海鼠塙（石川門右方太鼓塙）

面（内面）には製作に関わる調整痕が残りやすく、年代の指標となる場合もある。

瓦には上記の種類のほか、鬼瓦・棟瓦・熨斗瓦・面戸瓦・棟込瓦など、様々な種類がある。

なお、燻瓦の一つで、板状の正方形を呈する腰瓦（磚）は、海鼠塙と一体となり、金沢城の建物を特徴付ける海鼠塙を構成するものである。

【産地】

築城当初の燻瓦がどこで生産されたのかは未だ不明である。『三壺聞書』等の文献史料には、寛永17年（1640）前後に、能美郡の蓮代（台）寺（現小松市）で瓦が生産されていたことが記されている。蓮代寺は近世後期には陶器瓦（釉薬瓦）のほか、再興九谷として陶磁器も作られた窯業の里である。同じく同市日末にも窯跡があり、17世紀前半頃の瓦が散布している〔文44〕。これらの製品は、近接する小松城のほか、金沢城へも供給された。

金沢城の周辺では、城のすぐ南東に連続する小立野台において、土取場の地名が残り、瓦の原料となる粘土を採取としたとの伝承がある。また城下北東、卯辰山山麓では、近世前期のうちに瓦窯が成立していたことが、城下町絵図からうかがえる。

しかしこれらの生産地と、金沢城出土のどのタイプの瓦が照合するのか、詳細は不明な



城下町絵図にみえる瓦生産地

「金沢之図」（部分、加筆）金沢市立玉川図書館蔵
景観年代：享保（1716～36）頃

ところが多い。

なお腰瓦には「塙」の刻印を有する製品が一定量出土している。泉州塙（大阪府堺市）は、当時全国的な瓦の生産地でもあり、加賀藩では、越前以外の領外の製品についても導入を図っていたことがうかがえる。

近世後期では、文化6～7年（1809～10）の二ノ丸御殿再建時の普請記録である『御造営方日並記』により、先にあげた蓮代寺・卯辰山や、本吉（能美市）・八幡（小松市）等から瓦を導入していることがわかる〔文18・19〕。

【瓦の年代と変遷】

上記に記した瓦には流行した時期に違いがあり、近世の金沢城の屋根景観は、近世を通じて同一ではなかった。その変遷は5つの時期に大別できる。

I 一金箔瓦と桐文一

金沢城築城から間もない16世紀末～17世紀初め（1580～1620年頃）の瓦は、燻瓦で構成され、初期には金箔瓦が用いられていた。この頃の金箔瓦は、豊臣家との縁の深い武将の居城等にみられる。いもり塙調査区の下層や本丸附段等で出土しているほか、土砂に混入して城外に搬出されたと考えられる、前田氏（長種系）屋敷跡資料がある〔文23〕。出土事例は少ないが、未確認の天守や主要な門等



焼瓦 桐文軒平瓦



焼瓦 丸瓦裏面 コビキ A

に葺かれていたと想定される。

この時期の軒平瓦の瓦当文は、中心飾りを桐文とするタイプで占められていた。軒丸瓦の瓦当文は三巴文のみ知られている。丸瓦や平瓦も含め、厚さ2cmを越えるものもしばしばみられ、全体に重厚な作りである。

ところで瓦は、大きな粘土塊から板状の素材を切り出して製作されるが、この頃の切り離しには撚糸が使われた。この時、粘土には弧状の線状痕が残る。このような技法・痕跡をコビキAと称している。その後の製作において、あまり調整されることない丸瓦の裏面にそのまま残されることが多い。

II—三葉文と花文—

17世紀初期～前半（1620～40年頃）は、前代と同じく焼瓦で構成されるが、金箔瓦や桐文、コビキAの瓦は、1620年頃を境に廃れてしまう。軒平瓦の瓦当文は、中心飾りを三



焼瓦 三葉文軒平瓦



焼瓦 花文軒平瓦

本の細い葉が立ち上がる三葉文、あるいは牡丹の花を図案化したとみられる花文とするタイプが主体となる。粘土の切り離しには、鉄線が使われるようになり、効率化が図られたと言われている。粘土には直線的な条痕が並行して残るが、これは鉄線が粘土に含まれる砂粒を引きずった跡だと考えられている（コビキB）。

瓦の作りは、前半までは全体的に重厚さを保っているが、後半になると薄手の製品が目立つようになる。

III—梅鉢文と越前赤瓦—

17世紀前半から半ば（1640～60年頃）には、焼瓦は、前代に比べ端正・薄手・華奢な作りのものが目立つようになる。軒瓦の瓦当文には、前田家の家紋・梅鉢文が登場し、以降鉛瓦や釉薬瓦にも普及していく。焼瓦ではほかに、腰瓦が作られるようになったのもこの段階からと考えられる。

また、焼瓦に加えて、隣国越前において、越前焼（越前陶器）と同様の質で作られた陶器瓦、越前赤瓦が流行する。もっとも越前赤瓦の類品は、すでに1630年前後から導入されていた可能性がある。しかしいずれにしろ、流行はほぼこの段階のみの一時期であった。

特異な製品として、寛永20年（1643）創建の東照宮の一部の建物に葺かれた石瓦がある。



焼瓦（梅鉢文軒丸瓦・軒平瓦）



越前赤瓦

石瓦もまた越前福井が生産地である。越前は親藩松平家が統治していたが、物資の流通は盛んであったことがうかがえる。

IV—鉛瓦の出現—

17世紀後半～18世紀代（1660～1800年頃）は鉛瓦が出現し、主流となる時期である。その一方、燐瓦は腰瓦を除き、目立たなくなっていく。

金沢城の鉛瓦が文献史料に初めて現れるのは寛文5年（1665）であるが、その採用自体は若干遅る可能性がある。鉛瓦自体の出土事例は少ないものの、越前赤瓦や梅鉢文燐瓦が、17世紀後半の陶磁器等と一緒に廃棄されることや、宝曆9年（1759）のいわゆる「宝曆の大火」に際し、石垣に溶けた鉛の付着物が城内各所で観察できることなどから、出現と普及のようすが推察される。

燐瓦はまとまった出土事例を欠き、動向が

不明であるが、このことは、主要な門や櫓、堀の屋根など、その役割の多くの部分を鉛瓦に譲るかたちになったことを示唆するものであろう。ただし泉州堺など、領外の製品が導入される一方、地元の製品も生産量を落しながらも存続していたと想定される。

V—釉薬瓦の流行—

18世紀末から19世紀代に入る頃、南加賀では越前の瓦製作技術が導入され、赤褐色の釉薬が掛かる赤瓦の生産が始まった。金沢城では、文化5年（1808）火災後の二ノ丸御殿造営に際し、南加賀の八幡・蓮代寺や、金沢・卯辰山等の瓦が使用されている。二ノ丸御殿では、儀礼等を執り行う格式の高い場所には銅瓦が葺かれているが、役所や詰所に相当する箇所の多くは土瓦（粘土瓦）が葺かれていた。おそらく釉薬瓦が主体だったと考えられる。

発掘調査では、19世紀以後の資料として、瓦当文・釉調・胎土などがそれぞれ異なる、さまざまな釉薬瓦が出土しているが、明治時代になって廃棄された資料が大半である。八幡や卯辰山など産地が特定できる資料は一部で、大部分は詳細な産地や年代がはっきりしない。近代以後に作られた製品との判別も含め、解明すべき課題である。



鉛瓦



釉薬瓦

■ 建物部材と工具・金具

金沢城にかつて存在した様々な建物は、言うまでもなく木造であり、建物を構成する主たる材は木材だった。しかし木材は火災に弱く、腐りやすい。また建物が解体・撤去されても、部材は再利用されることが多かった。そのため木製の建物部材の出土例はたいへん少ない。ただし水分が残る地中では、比較的良好に遺存している場合がある。金沢城では、橋脚や欄干といった橋の部材など、堀の中から出土した建物部材が幾つかある。

建築に関わる道具として多く出土したものに、釘や鍵といった金具類がある。釘には銅製と鉄製がある。頭部が円形、あるいは円筒形をしたものは、鉗と呼ぶべきかもしれない。このうち小型の銅製品は、鉛瓦を下地の木部を打ち付けることに多く利用されたと考えられる。



橋爪一ノ門前 橋脚基礎と内堀〔文4〕

鍵は通常の形状のほか、板状で釘穴が備わる目鍵が、橋の周辺からまとまって出土した。なお、建物の内装に関する装飾豊かな釘隠が、昭和44年の調査で出土した。『二ノ丸御殿内装及び見本・絵形』(金沢市立玉川図書館蔵)に描かれた絵画資料と酷似している。

■ 石垣普請の工具・金具

石垣は、築石(石垣石材)を積み上げ、築石間や背後の基盤層との間に小型の礫(栗石)を充填した構築物である。築城当初の石垣石材は、自然石や粗削石だったが、17世紀前半頃にはノミによる加工が進んだ粗加工石や切石が使用されるようになった。

金沢城の石垣解体調査では、石材の整形などにつかうノミ、石を割る際に用いる矢が出土した。矢の利用は次の通りである。対象となる石に列状に穴(矢穴)を掘り、穴ごとに矢を差し込み、鉄製の槌で矢を叩いて石を割



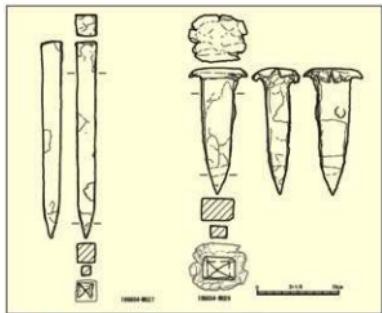
石垣の構造(玉泉院丸南石垣)〔文30〕



鍵・釘



矢による石割



ノミ・矢実測図 (五十間長屋下石垣) [文6]



敷金検出状況 (橋爪門統槽) [文4]

り割くのである。

また、角石など切石材を積む際は、その安定を図るために、楔形や鎌形（建築用を転用）などの金属製品を配置することがあった。これを敷金（しきがね）といった。

敷金の種類や大きさは時期によって異なり、17世紀後半は楔形・鎌形とも大振りで、18世紀後半には楔形が小型化し、19世紀前半には鎌形のみとなる。この他、鉄の細い延べ棒を素材とするバネ状の製品がある。これは石材の左右の隙間に挟み込んで安定を図ったものと考えられる。

■ 作事・普請と折り

現在でも工事の着工時には地鎮祭や起工式を行うことがある。江戸時代はこれらの儀礼行為は盛んに行われており、金沢城では橋の架け替えや石垣改修時の事例が知られている。

三ノ丸から内堀をはさみ二ノ丸の正門であ

る橋爪門に渡す橋の跡のすぐそばでは、刀二振りと柄鏡、銅錢5枚が置かれているのが検出された。橋は数度架け替えられていて、群邪の意味を込めた儀礼があったことがうかがえる。

また五十間長屋石垣上部北東隅では、一边16cm程度の立方体の石材が並んで出土した。石材には「鍛始」「鋤始」の文字と「宝曆十三癸未年六月廿五日」との日時が刻まれていた（鍛始刻石）。宝曆13年（1763）の石垣改修に伴って、鍛始（起工式）が執り行われたことを示すもので、他に例を見ない出土品である。なお、この鍛始については、その時使用され、儀式の次第などが墨書きされた神具机が、市内波自加弥神社に伝来している〔文45〕。



五十間長屋石垣北東角 上部石垣背後より鍛始刻石が出土



鍛始刻石出土状況 [文4]

瓦

燐瓦

燐瓦は金沢城においては、近世初期から17世紀半ばまで屋根瓦の主体となっていた。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・腰瓦・熨斗瓦・棟込瓦などの種類が見られる。

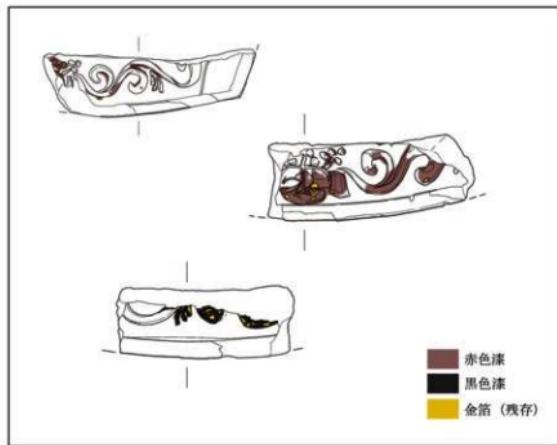
◆金箔瓦

本丸附段およびいもり堀に先行する堀（本丸南堀）や本丸附段で、文様部分に金箔が貼り付けられた瓦が出土している。金箔の接着剤として漆が使われた。築城初期の建物に葺かれていたもので、同様の金箔瓦は、豊臣秀吉と縁の深い全国各地の城郭から出土している。



8. 金箔瓦（軒丸瓦）

本丸附段、本丸南堀
塗布された漆の上に金箔が残って
いるのが確認された。

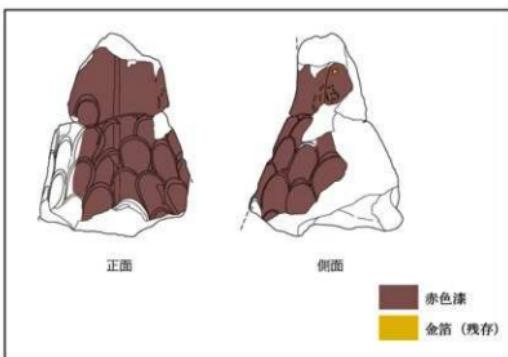


9. 金箔瓦（軒平瓦）
本丸南堀



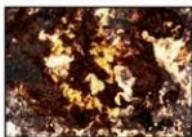
正面

侧面

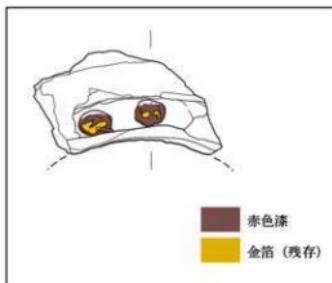


赤色漆
金箔（残存）

10. 金箔瓦（鰐瓦）
本丸南堀



11. 金箔瓦（器種不明）
本丸南堀



赤色漆
金箔（残存）

◆桐文軒平瓦と丸瓦・平瓦

元和6年（1620）頃までに廃棄されたと考えられる初期の瓦である。このうち軒平瓦の瓦当の中心飾りは桐文が主体となっている。重厚な作りの製品が多く、金箔を貼ったものもみられた。



12. 軒平瓦（桐文）

本丸附段、二ノ丸内堀、河北門、玉泉院丸、本丸南堀
中心飾りの桐文の形状や唐草の表現にバリエーションが
見られる。



表面（尻から）



裏面



表面（尻から）



裏面



14. 平瓦

本丸附段

厚手のもの(21~23mm中心)が目立つ。

13. 丸瓦

本丸附段（上）、本丸南端（下）

丸瓦は裏面にコピキAの粘土切り離し痕を残すものが多い。

◆三葉文・花文等軒平瓦と軒丸瓦・丸瓦・平瓦

寛永年間（1624～44）頃までに廃棄されたと考えられる瓦である。軒平瓦の瓦当の中心飾りの文様について、三つの葉で構成される三葉文と花で構成される花文が主体となっている。どちらもバリエーションが多く、寛永8年大火以後もしばらく存続する。



15. 軒平瓦（三葉文）

本丸附段、河北門、石川門前土橋
中心飾りの三葉文の開きや唐草の巻き方に
バリエーションがある。



16. 軒平瓦（花文）
本丸附段、河北門
中心飾りの花弁や葉、唐草の描かれ方に
バリエーションがある。



17. 軒丸瓦（巴文）

本丸、本丸附段、河北門

瓦当文様が巴文で、左回りと右回りがあり、
前の尾部が次の尾部の中程まで続く。珠文の
数にバリエーションがある。



18. 軒平瓦（垂下型三葉文・五葉文）

玉泉院丸、石川門前土橋

中心飾りの三葉文ないし五葉文が下を向き、
上に小さな葉が2枚つく。



19. 丸瓦

本丸附段

コビキ B の切り離し痕をもつ。



20. 平瓦

本丸附段

前段階よりわずかながら厚さが
減じている (19 ~ 21 mm 中心)。

◆梅鉢文軒丸・軒平瓦

前田家の家紋である梅鉢文が、瓦に用いられたのは、金沢城では寛永8年（1631）より後のことである。燻瓦だけではなく、鉛瓦や釉薺瓦にも採用されており、近世後期以後も存続する瓦文様である。



21. 軒丸瓦

玉泉院丸、石川門前土橋

瓦当に梅鉢文が施されているもので、軸の有無、中心と花弁の大きさ、花弁から中心までの距離の長短などにバリエーションが見られる。



22. 軒丸瓦 石川県埋蔵文化財センター蔵

堂形

花芯に刺突文を施し、花弁の周囲に唐草文を配した梅鉢文の軒丸瓦で、堂形出土例の他に類例がないものである。



23. 軒平瓦

本丸、玉泉院丸、いもり堀

瓦当の中心飾りが梅鉢文で、唐草の形状に

バリエーションが見られる。

◆腰瓦

腰瓦は檜・長屋・塀の壁に取り付けられた瓦である。大型の銅釘（貝折釘）で壁に打ち留め、漆喰で目張りされたとされ、正面四辺の中央の凹部（窪み）は、釘の頭が掛かる部分と考えられる。凹部の形状にはいくつか種類があり、産地や時期を反映していると推定される。金沢城では寛永8年（1631）以降に使用されたとみられる。



凹部（拡大）

24. 腰瓦

いもり堀

側辺中央の凹部は平面半円形で、
底面は平らに調整されている。



凹部（拡大）

25. 腰瓦

二ノ丸内堀

側辺中央の凹部は平面半円形で、
底面を平らに調整しない。

26. 銅釘（貝折釘）

二ノ丸内堀

圓錐状の頭が短く折り曲げられ、側面L字形を呈する銅
釘。貝折釘は、石川門の解体修理の際、檜や塀の外壁素
材である腰瓦を打ちとめていたことが確認されている。





側面の刻印〔拡大〕



凹部（拡大）

27. 腰瓦

玉泉院丸

側辺中央の凹部が平面方形。側面上に「」の刻印が認められることから、現在の大坂府堺市で生産された製品であることがわかる。



凹部（拡大）



28. 腰瓦

二ノ丸内堀

側辺中央の凹部が細く浅く粗雑化している。

29. 黒漆喰仕上げの海鼠漆喰

玉泉院丸

海鼠壁に用いられた漆喰で、腰瓦と腰瓦の間に目地として用いられた。鼠多門の発掘調査で出土した海鼠漆喰は、白漆喰で形作った上に、炭を混ぜて黒くした黒漆喰が仕上げとして塗り重ねられていた。このような海鼠漆喰は近世城郭では他に類を見ないもので、鼠多門の名称について、壁が鳴い色調（鼠色）だったためとする説と合致する。



玉泉院丸 海鼠漆喰出土状況

越前赤瓦

金沢城では17世紀半ばから後半にかけて、越前陶器と同質で、鉄分を多く含む土を薄めたものを塗って赤く焼き上げた陶器瓦（越前赤瓦）が使用された。特にいもり堀の下層や三十間長屋西の瓦層で多数出土している。17世紀後半に梅鉢文燻瓦・越前赤瓦がまとまって廃棄され、その上位に溶解した鉛を大量に含む層が認められることから、宝暦9年（1759）大火で鉛瓦が被災する以前の17世紀後半に赤瓦等から鉛瓦へ改められたと考えられる。



30. 軒丸瓦

いもり堀

瓦当文様は巴文で、右回りと左回りがある。巴の尾の長さや珠文の数にバリエーションがある。



31. 軒平瓦

本丸附段、東ノ丸、河北門、御宮、いもり堀
瓦当の中心飾りは半葉文である。半葉文は葉の形状や
葉脈の本数、唐草の形状にバリエーションが見られる。



釘穴（拡大）



32. 丸瓦

いもり堀

被熱している。表面に釘穴がある。



表面尻から



裏面の調整痕

33. 丸瓦

いもり堀

表面に重ね焼きによる溶着痕がある。

体部裏面には調整痕が残る。塗りは裏

面には施されていない。



34. 平瓦
本丸附段



35. 平瓦
いもり堀



36. 熨斗瓦
いもり堀
平瓦を縦に二分しているが、割ったところを
面取りするように削って、丸く仕上げている。

石瓦

御宮から緑色凝灰岩製の石瓦が出土している。緑色凝灰岩は、笏谷石と呼ばれる現在の福井県福井市足羽山周辺で採掘された石材とみられる。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦等で構成されており、本瓦葺の屋根を構成すると推測される。このような石瓦がまとまって出土しているのは御宮のみであり、三葉葵文が刻まれた鬼瓦の存在や出土地点から、これらは寛永20年（1643）造営の東照宮に関連する屋根瓦と考えられる。



表面



裏面

下広がりの台形の塗みがあり、棟瓦が接続する。



石瓦出土状況

東照宮造営により造成された平坦面が御宮側の斜面上からの流土により埋没する過程で、石瓦が煙瓦や17世紀中葉の遺物とともに廃棄されている。

37. 鬼瓦・鳥衾

御宮

鬼瓦は両側面に突起がある形で、表面が丸く削り込まれていて鳥衾が乗る。中央には三つ葉葵の紋が陽刻されているが、茎が長い古い形であり、本来葉脈が描かれているところに丁子のようなものが陽刻されている。



38. 軒丸瓦

御宮

瓦当文様は左回りの巴文で、陽刻されている。
珠文がなく、巴は扁平で頭部が小さく尾が幅広い、粘土瓦には見られないタイプである。



40. 軒平瓦

御宮

欠損のため、瓦当の中心飾りは不明。文様区の輪郭と唐草文の周囲を沈線状に窪ませている。



39. 軒丸瓦

御宮

瓦当文様は左回りの巴文で、
陽刻されている。



41. 軒平瓦

御宮

瓦当の中心飾りは四葉で、唐草は1本ずつ独立
している。文様区全体を窪ませて、中心飾りと
唐草文を浮き彫りにしている。



42. 掛瓦（箕甲瓦）

御宮

軒平部は文様区が木瓜形であり、文様区の輪郭と唐草文の周囲を沈線状に窪ませている。欠損のため中心飾りは不明だが、唐草文はそれぞれが独立している。小丸部は扁平な左回りの巴文で、軒丸瓦と同じである。



43. 丸瓦

御宮

体部は玉縁側が厚く、正面側が薄い。側面は横に開き、裏面の抉りが浅い。玉縁部は緩やかなカーブの山型となっている。

側面

裏面の調整



表面



裏面の調整

44. 丸瓦

御宮

棟瓦に接する部分の丸瓦。玉縁部が無く、両端が平らに調整されている。



45. 平瓦

御宮

表面と正面・側面が丁寧に調整されている。



表面



裏面の調整

46. 平瓦

御宮

表面と正面・側面は丁寧に調整されている。
裏面は頭部側を平滑に調整し、残りはツル痕
が強く残っている。



47. 栓瓦

御宮

左栓瓦である。表面と正面・側面は平滑に調整されている。裏面は頭部側と山部は比較的丁寧に調整されているが、それ以外はツル痕が強く残っている。



48. 栓瓦

御宮

左栓瓦。裏面に「△」の陰刻
のようなものがある。

裏面の調整



49. 棟瓦

御宮

四角い棒状で、裏面は深いV字形に抉られて
いる。石段の雁木石に転用されており、表面
に石段の使用痕跡と思われる摩耗が見られる。



石段検出状況

緑色凝灰岩製の棟瓦を雁木として転用した簡易な
石段がつくられ、御宮と藤右衛門丸をつなぐ通路
として利用されていた。

鉛瓦

鉛瓦は木の下地に、薄い鉛の板を張り付けて、瓦屋根状に仕上げたもので、金沢城では17世紀後半から櫓や土蔵、堀の屋根瓦の主体となった。いもり堀の発掘調査では、煤が付着したものや木の下地が炭化したものが出土しているが、これらは宝暦9年の大火（1759）で被災し、廃棄されたものとみられる。



表面



裏面

50. 軒丸瓦

東ノ丸附段

裏面の観察より、文様が打ち出しによるものとわかる。



表面



裏面



銅釘による固定（側縁下から）

51. 軒丸瓦

二ノ丸内堀

上端が欠けた円形を呈する木型の表側には文様を打ち出し円筒状に整形した鉛板が、裏側下半には別造りの半円形の鉛板が取り付けられ、側縁・裏面を銅釘で固定した。



表面



裏面



銅釘による固定（側縁下から）

52. 軒丸瓦

いもり掘

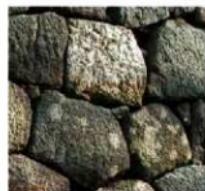
煤が付着し、木の下地が著しく炭化していた。



53. 銅釘

二ノ丸内堀

断面不整四角形の本体に略円形の頭が付いた形状
で、鉛瓦や銅板等の打ち付けに用いられた。



火災で溶け落ちた鉛瓦の滴（鯉喰櫓台石垣南面）
石垣面の白い付着物は、宝曆大火により溶け落ちた塙の
鉛瓦の滴である。



54. 軒平瓦

河北門

瓦当の文様は唐草文で、上面に木の下地に
固定するための釘穴が2ヶ所あいている。



表面



裏面

55. 軒平瓦

河北門

文様を打ち出した工具痕が明瞭である。

上面に釘穴2ヶ所あり。



表面



裏面

56. 軒平瓦

いもり掘

煤が付着している。裏面に文様を打ち出した工

具痕が明瞭に認められる。

釉薬瓦

19世紀代には鉛瓦と並んで、小松市八幡窯や金沢市卯辰山周辺などで生産された釉薬瓦が多く利用された。刻印は「宍」や「卯辰山」などが見られる。なお、釉薬瓦は近代に入って作られた製品との区別が難しいものがあり、課題となっている。



体部の釘穴
2箇所あり。



体部の釘穴
2個1組の釘穴が
2組あり。



57. 軒丸瓦

二ノ丸内堀、玉泉院丸

瓦当文様は巴文と梅鉢文(刻梅鉢)。



釘穴に残る釘
(下面から)



刻印「〇」
(拡大)

58. 軒平瓦

玉泉院丸

瓦当の中心飾りは梅鉢文で、煙瓦の梅鉢文
軒平瓦と類似した特徴をもつ。

次頁掲載の「卯辰山」刻印銘瓦と胎土や釉
調が似通っているものが多く、卯辰山産と
考えられる。



釘穴に残る釘
(上面から)



刻印（拡大）

59. 軒平瓦

玉泉院丸

瓦当文様は菊花と流水からなり、瓦当右上に「卯脛山」の刻印を持つ。尻部にあけられた釘穴に釘が残る。



60. 軒棟瓦

玉泉院丸

瓦当の中心飾りは五弁花文。輪郭線で描かれた葉状の唐草がある。



61. 軒棟瓦

御宮

瓦当の中心飾りは星文である。
近代の製品の可能性がある。



62. 軒棟瓦

玉泉院丸

瓦当の中心飾りは桜文である。
近代の製品の可能性がある。



体部の釘穴



刻印「◎」
(拡大)



刻印 ◎
(拡大)

63. 軒平瓦、軒棟瓦

二ノ丸内堀、玉泉院丸

いずれも瓦当の中心飾りは玉文で、玉や唐草の形状にバリエーションが見られる。軒棟瓦の小丸部の瓦当文様は刻梅鉢である。

「◎」の刻印や胎土などから、八幡など南加賀の製品とみられる。



64. 軒棧瓦

本丸附段、三ノ丸、玉泉院丸

瓦当の中心飾りは菊花文で、花弁の数や形状、
唐草の形状にバリエーションが見られる。

65. 丸瓦

本丸附段

体部中央に短軸方向に内面から穿孔された釘穴が2個見られる。



66. 平瓦

玉泉院丸

被熱のため軸が一部とんでいる。
尻部に上面から穿孔した釘穴が1個あるが、貫通していない。
正面に「Ⓐ」の刻印がある。



刻印「Ⓐ」
(拡大)



67. 棟瓦

玉泉院丸

尻部山側に上面から穿孔した釘穴が1個ある。



68. 巴瓦

玉泉院丸

瓦当面は松の形で、表面は刺突されている。
釘穴が体部中央の短軸方向に2個、長軸方向に2個、内面から穿孔されている。



刻印「◎」
(拡大)

69. 谷丸瓦

玉泉院丸

体部に長軸方向に穿孔された釘穴

2個と、「◎」の刻印を持つ。



釘穴に残る釘 (下面から)



刻印「◎」
(拡大)

70. 谷筋違い瓦

玉泉院丸

尻部に2個、山部に縦方向に2個、釘穴がある。山部正面の「◎」の刻印や胎土などから、八幡など南加賀の製品とみられる。



71. 棟瓦

玉泉院丸

上面に5条の櫛描き平行沈線を施している。焼成前に上面から穿孔した釘穴が2個あり、釘が僅かに残っている。



72. 棟瓦

橋爪門

体部中央に上面から穿孔した

釘穴が2個ある。



銅線の残る釘穴
(上面から)



73. 紬藁瓦（熨斗瓦）

玉泉院丸

片側の側縁付近にあけられた
穴に、銅線が残っている。



74. 熨斗瓦

玉泉院丸

半割りされている。片側の側縁付近に
上面から穴があけられている。



釘穴に残る釘（表
面から）



表面



裏面に付着する離れ砂

75. 面戸瓦

玉泉院丸

蟹面戸で、表面から穿孔した釘穴2個のうち片側に
釘が残り、裏面には離れ砂が付着している。



76. 面戸瓦

玉泉院丸

無軸の把手付軽節型の面戸瓦。把手の
形状は台形である。



刻印「⑦」
(拡大)

77. 棟込瓦（輪違）

玉泉院丸

頭部に2個、尻部に1個、釘穴が
ある。正面に「⑦」の刻印がある。



裏面の調整痕

78. 棟込瓦（輪違）

玉泉院丸

内面はコビキBで、棒状圧痕が残って
いる。体部中央に釘穴が2個ある。

建築部材と工具・金具

木材など

二ノ丸内堀やいもり堀、本丸南堀からは、橋などの建築に関する大型の木材が出土している。



側面

上面

側面

下面



端部の加工



部材取り上げ作業

79. 大型部材

本丸南堀

長さ 474.3cm 以上、最大幅 33.5cm を測るマツ属の芯持材で、粗い面取りが施された断面略方形の形状をとる。残存する端部に施された継ぎ手の細工（蟻継）の形状から、本部材は水平材とみられるが、下部にも梢穴があり、継ぎ手の下方にも何らかの材が取り付いていたと考えられる。表面の大部分が炭化していたが、意図的に焦がされたものと考えられる。橋桁などとして使われた可能性がある。



内堀 橋脚基礎 全景

二ノ丸内堀東部西端に位置する三ノ丸と橋爪一ノ門を結ぶ木橋の橋脚の基礎9箇所を検出した。橋脚基礎は、長径2mに及ぶ穴（橋脚掘方）や礎石で構成されており、架橋方向（南北方向）に沿って、中央・東・西の各列に3基ずつ橋脚が配置されている。また、橋脚列周辺の土層の堆積状況から、橋は3段階の架け替えが推定される。



80. 橋脚

二ノ丸内堀

遺存していた橋脚の基部である。断面方形で側面間は面取りされ、先端は杭状に削り出されている。樹種はツガ属。



内堀 橋脚検出状況

最終段階の橋脚本体の一部が、原位置をとどめた状態で遺存していた。下位で確認された盤状の戸室石は前段階の礎盤である。



81. 欄干

二ノ丸内堀

二ノ丸内堀橋脚基礎付近で出土した欄干の親柱である。断面方形で、側面のうち1面には上下二段に枘穴があけられている。また、上端部は面取りされている。樹種はケヤキ。

釘

城内各所で銅製及び鉄製の釘が出土している。銅釘は、檜や塀の外壁素材である腰瓦を打ち留めるのに用いられ（貝折釘）たり、鉛瓦や銅板の打ち付けに用いられたものがみられる。鉄釘は、銅製と同様の形状の貝折釘、頭の形状が円筒状（鉢状）を呈するもの、頭巻釘に大別できる。



82. 鉄釘

二ノ丸内堀、五十間長屋

83. 銅釘

二ノ丸内堀、五十間長屋

鎌・目鎌

金沢城の調査で出土した鎌には、建築部材として用いられたものと石垣の敷金として用いられたものがある。ここでは建築部材として用いられたものを紹介する。

目鎌の歯は一方のみで、胴部は一般の鎌に比べて薄く、釘穴（目）が2～3箇所あけられている。特に内堀で集中して出土している。



84. 鎌

二ノ丸内堀、菱檜

木製部材の連結に使われ、様々な長さの物が見られた。中には長大で、刃の長さが左右で異なるものもあった。



85. 目鎌

二ノ丸内堀

釘穴が2～3箇所あけられているものが見られ、鉄製貝折釘と組み合わせて用いられたことを示す資料がある。

その他

二ノ丸内堀、五十間長屋、菱櫓から出土した建築部材とみられる金具や工具を集めた。金具の材質は鉄や銅、銅・鉛の合金などである。



86. 金具

二ノ丸内堀、五十間長屋、菱櫓



釘隠絵形

「二ノ御九御殿御造営内装等覚
及び見本・絵形」(部分)
金沢市立玉川図書館蔵



87. 釘隠 金沢大学資料館蔵

二ノ丸

御殿の内装を構成する飾り金具で、
出土状況より、文化7年(1810)
に再建された後期御殿より前に使
用されていたと考えられる。扇を
モチーフとしており、後期御殿の
絵形とほぼ同様の意匠である。



88. 金鎌

二ノ丸内堀

石垣普請の工具・金具

ノミと矢

石垣解体調査では、石を割り加工する道具・工具も少量出土した。ノミは槌（ハンマー）と合わせて使い、石の形を整える道具である。矢は石を割るときに用いる道具の一つで、割る石に列状に穴（矢穴）を掘っておき、鉄製の鎧でたたいて打ち込むことで、石に水平方向の圧力を加えて割り裂くものである。



89. ノミ

橋爪門続櫓

鉄製。鋭利な先端を持ち、細身で
断面角柱形を呈する。



90. 矢

五十間長屋

鉄製。先端は鋭利で、頭部に
叩いた痕跡が見られる。

敷金

五十間長屋下石垣などの石垣の解体調査で、石垣石材の安定を図るため石材間に隙間に配置された敷金が出土している。敷金には鎌形、楔形のものに大別される。鎌形は建築部材の鎌の転用と考えられる。楔形は、17世紀後半段階では大型品が目立ち、18世紀後半段階では小型化し、19世紀前半では使われなくなるようである。このほか、少ないがバネ状のものも見られ、出土状況から敷金の一種と考えられる。



91. 敷金（17世紀後半）

菱檜

寛文8年（1668）の石垣修築で
使用された。



敷金検出状況（菱檜）

寛文8年（1668）の石垣修築部分で検出



92. 敷金（18世紀後半）

河北門

宝曆 11 年（1761）の石垣修築で
使用された。



刻印「CO」と「口」



93. 敷金（19世紀前半）

橋爪門続檼

文化 5 年（1808）の石垣修築で
使用された。



94. バネ状製品

橋爪門続檼

断面多角形を呈する棒状の鉄素材を、円をなすように
3 回ほど右方向に巻いて仕上げられている。石材の左
右の間に挟み込む敷金の一種で、文化 5 年（1808）
の石垣修築で使用されたと考えられる。

作事・普請と祈り

刀・鏡・銭—橋架け替えの儀礼—

三ノ丸と二ノ丸を結んでいた橋（内堀橋）の橋脚基礎付近で、刀2振り、柄鏡1柄、銭（寛永通宝）5枚が出土した。これらは、銭（寛永通宝）の初鋳年代や柄鏡の製作年代から、宝暦9年（1759）の大火以後、橋の架け替えに係る儀礼の際に供えられたと考えられる。



95. 柄鏡

二ノ丸内堀

本体の材質は銅・鉛の合金である。鏡背の文様は、地文に松・笹竹・鶴・亀を配した蓬莱文で、「藤原周重」の銘が入る。藤原周重は京都の鏡師らしく、江戸時代中期の作品が残っているようである。



96. 寛永通宝

二ノ丸内堀

古寛永1枚と新寛永4枚が供えられた。初鋳年の一番新しいものの2枚が享保11年（1726）であることから、儀礼が行われた時期は享保11年以後であると考えられる。

97. 刀

二ノ丸内堀

鞘・鈔・柄が外された状態で出土している。
銘はなく、二重ハバキが装着された状態となっ
ている。また、検出時に分離していたが、こ
の刀に伴うとみられる切羽も出土している。



刀側切羽

柄側切羽

98. 切羽

二ノ丸内堀

材質は銅。刀身とは分離して検出された。



目貫（拡大）

99. 刀

二ノ丸内堀

黒色漆塗りの樹種モクレン属の鞘に収まつた
状態で出土した。鞘の先端（こじり側）は欠
損している。鞘・柄のほか鈔・切羽・緑・目
貫・柄頭等が装着されていた。目貫の材質は
銅で、表面に鍍金が認められる。



刀出土状況

内堀橋東橋脚列の北、三ノ丸南面石垣の前で、刀を石垣側に
向けた状態で出土した。このことから、儀礼には橋を守る辟
邪の意が込められていると思われる。

鍛始刻石

二ノ丸五十間長屋台石垣の解体修理工事に伴う発掘調査で、銘文の刻まれた赤戸室石の切石材が2つ出土した。切石は一辺15～16cm程度の立方体を呈し、角石・角脇石の控えの間に南北に連なって安置された後、栗石で覆われていた。上面・下面にそれぞれ銘文があり、北側の石は上面に「宝曆十三癸未年 鍛始 六月廿五日」、下面に「鍛始」、南側の石は上面に「宝曆十三癸未年 鍛始 六月廿五日」、下面に「鍛始」と刻まれていた。これらは石垣改修の際の起工式（鍛始）を記念したものと考えられる。これらの石の出土により、石垣の修築時期や、石垣改修の際に「鍛始」の儀式が行われたことが明らかとなった。



北側の石（上面）



北側の石（下面）



南側の石（上面）



南側の石（下面）

100. 鍛始刻石

五十間長屋

干支の「癸未」は横に並べ、「未」をやや上に置いている。上面では「鍛始」・「鍛始」の文字が大きく、両側の文字はやや小さくなっている。



鍛始刻石出土状況

呪符墨書き土器と五鉢杵

玉泉院丸から内面にまじないとみられる文字が書き連ねられた土師器皿（呪符墨書き土器）と、密教法具の一つである五鉢杵が出土した。金沢城内では珍しい遺物である。



101. 呪符墨書き土器

玉泉院丸

17世紀初頭まで遡る、庭園の作庭以前の武家屋敷時代の
製品で、内面にまじない文字や符号が墨書きされていた。



102. 五鉢杵

玉泉院丸

古代のインドの武器をもととし、密教などで
加持・祈祷に用いられる法具。明治時代以後
の土層から出土しており、本来の年代や使わ
れ方などは明確ではない。

城の暮らし・勤めとモノ—生活・勤務に関する出土品—

解説

■ 城内の暮らしと勤め

近世城郭は軍事の拠点であるとともに、領国統治の中核であり、領国を治める藩主とその家族の邸宅でもあった。

寛永8年（1631）の大火以前、金沢城では、本丸・東ノ丸一帯に御殿があり、藩主が暮らす生活空間がその一角を占めていた。また初期の城内の景観を伝える絵図には、新丸・玉泉丸・三ノ丸・二ノ丸などの曲輪に、主だった家臣らが屋敷を構えている状況が描かれている。詳細な内容については検討すべき点も多いが、発掘調査地点の下層からは、陶磁器など生活用具が出土しており、武家屋敷の存在を示唆している。この頃は、城内の各所に、暮らしの空間が点在していたのである。

寛永8年以後、家臣の屋敷の大半は城外へ転出し、御殿も二ノ丸へ移った。二ノ丸御殿は、対面の儀式などの場が中心であった「表向」、藩主とその家族の居住空間が多くを占めた「御居間廻り」「奥向（広式）」で構成されていた。

こののち、金谷出丸や蓮池・竹沢（のちの

兼六園）にも屋敷や御殿が置かれ、城内の暮らしは、御殿に住まう藩主とその家族、これに仕える女中衆により営まれることとなる。事例は少ないものの、二ノ丸御殿での暮らしに関わる遺物も出土している。

城内での暮らしは、二ノ丸など御殿の一角に限定される一方、御殿には執務空間も多く占めていたし、他にも城内には役所・番所・門・櫓・土蔵など、居住施設とは異なる多くの建物があった。藩士達にとっては、城は暮らしの場所ではなく、勤め先だった。

役所や番所付近の発掘調査では、陶磁器の碗・土瓶・火鉢等がセットで出土することが多い。これらは役所や番所に共通に備え付けられた、いわば備品の一部と考えられ、先に紹介した、日常生活の陶磁器とは性格を異にすると言える。

これとは違って、その場所の役割・性格を如実に示す出土品もある。二ノ丸五十間長屋における鎌や、三ノ丸の鉄砲所における鉄砲部品などの武器は、その最たるものである。



二ノ丸御殿（近世後期）

「御城中老分基絵図」（部分、加筆） 横山隆昭氏蔵

■ 城内の暮らし—御殿と武家屋敷の出土品—

【寛永大火以前の本丸とその周辺】

本丸については、天守の位置や御殿建物の詳細な配置など、中枢部分の実態は不明である。しかし発掘調査により、出入口や庭園造構を確認するとともに、御殿で使用された陶磁器や、食物残滓として捨てられた魚骨などを検出した。

本丸周辺出土の陶磁器は、他の曲輪の出土品に比べると上質の製品が目立つ。東ノ丸附段では、東ノ丸や本丸から廃棄された、寛永8年（1631）大火被災資料が出土した。いずれも小片であるが、中国磁器五彩皿等、他の曲輪ではみられない優品がある。

また本丸南東部では、寛永大火で被災した礎石建物周辺で、中国製の陶器壺・天目茶碗、ベトナム製の長胴瓶、国産品では九州高取窯の壺ないし水指、信楽や伊賀の壺など、茶の



礎石建物検出状況（本丸南東 2008-1SB01）〔文 8〕

湯に用いられた茶器の破片が見つかった。

本丸の西側に隣接する本丸附段は、寛永8年の大火後、三十間長屋等少数の建物が建つ広場となったが、大火以前は板塀・鍛冶場・穴藏・池状造構・ごみ穴などが密集する空間だった。本丸にあった御殿の裏手にあたり、御殿の生活を支える奥向きの一角だったとみられる。ごみ穴からは陶磁器や土師器皿の破片のほか、魚骨がまとまって出土した。本丸御殿の食生活の一端を示すものである。なお池状造構では馬の頭蓋骨の一部が供えられていた。埋め戻しの際のまじない行為と考えられる。

【城内の武家屋敷】

三ノ丸河北門の発掘調査では、城内でも重要な門の一つである河北門の変遷過程が判明するとともに、慶長年間（1596～1615）後半以前、門に隣接して武家屋敷が営まれていた



本丸附段調査区〔文 2〕



馬骨出土状況（本丸附段 2004-1SK11）〔文 2〕

ことが明らかになった。古段階の河北門の通路との境の溝には、様々な陶磁器が捨てられていた。碗・皿類に加えて、擂鉢のような調理具があり、日常的な生活が営まれていたことがうかがえる。

陶磁器食膳具の生産地としては、中国のほか、中世には国内唯一の施釉陶器の産地であった瀬戸・美濃を抑え、九州肥前地方の陶器（唐津焼）が主体となっている。肥前地方の陶磁器は、このち金沢のみならず、北陸地方の暮らしに欠かせない食器として、江戸時代を通じて普及する。

河北門の南西、五十間長屋の下層でも、やはり寛永以前の武家屋敷の一角が発掘された。遺構の主体は壁土を取ったと考えられる土取り穴であるがごみ穴に転用されており、河北門下層よりやや新しい時期の遺物が多数出土した。ここでは陶磁器のみならず、金属製品や木製品も残っていた。金属製品では、煙管の雁首・吸口や中国錢などのほか、刀装具の一種・小柄がある。

木製品には漆器碗や鉢といった食器や、下駄や玩具（人形）など、多様な暮らしの用具がみられ、城下町遺跡と変わらない遺物の組み合わせを示している。

【二ノ丸御殿と「部屋方】

寛永8年（1631）の大火後、上記の武家屋敷を埋め立て、拡大造成された二ノ丸に、大規模な御殿が新たに設けられた。このうち御殿のおおよそ西側（「御居間廻り」「奥向」）が、藩主とその家族の邸宅部分に相当する。

「奥向」の一角には、藩主とその家族に仕える女中衆の住まい「部屋方」が営まれた。御殿で使用された生活用具の実態はあまり明らかになっていないが、玉泉院丸鼠多門付近では、明治初期になって旧「部屋方」から用済



河北門下層 S0006（屋敷境の溝）〔文3〕



武家屋敷で使われた陶磁器（河北門下層）



漆器碗出土状況（五十間長屋下層）〔文5〕

みとなって廃棄されたと推定される、紅皿などの化粧道具がまとまって出土している。

また玉泉院丸では、土人形や土製の独楽が出土している。これらは城内の他の場所ではみられない特徴であり、二ノ丸奥向から出向いた住人達が、玉泉院丸庭園で遊興していたことを想像したくなるが、紅皿などと同じく、二ノ丸奥向で使われていたものが、まとめて廃棄された可能性もある。

■ 城内の勤め—役所などの出土品—

【役所・番所の陶磁器】

城内の各所にあった役所や番所付近を発掘すると、たいていの場合、陶磁器の碗が目立つて出土し、それに土瓶や小型の火鉢が若干加わる。一方、皿や鉢等の食膳具はあまりみられない。碗は、同一種類がまとまった揃いの状態であることが多い。また碗や火鉢には役職等を示す釘書や墨書きが記された事例がある。このような碗や土瓶は、役所や番所に備え付けられた喫茶用具、火鉢は暖房具と考えられる。これらは明治初期に廃棄されているが、生産年代が古いものが多く、年代物を長期間使っていたことになる。上記したような性格上、頻繁に取り換えられるものではなかったようである。

【三十間長屋と御鳥部屋】

城内各所の出土品には、出土場所の性格を強く示す、その場所ならではのものも認められる。

本丸附段階付近の調査では、上層から多くの陶磁器が出土したが、先に紹介した役所や番所付近と異なる一つの特徴があった。ここでは皿や鉢といった、大型の食膳具が目立つてみられたのである。復元すれば直径30cmを越える大皿も含まれており、多くのものに熱を受けた痕跡が認められる。



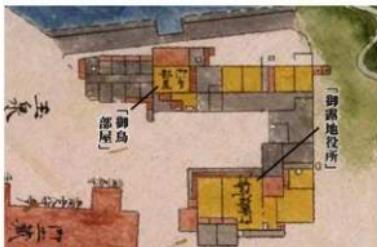
三十間長屋



役所で使われた陶器碗・火鉢（玉泉院丸）

本丸附段の西辺には、寛永年間（1624～44）頃より三十間長屋が建っていた。現存の建物は二代目で、安政5年（1858）の再建である。初代の三十間長屋は宝暦9年（1759）の大火で焼失したが、絵図の記載によると「台所方」の管轄で、「御家具土藏」とも呼ばれていた。これらを考え合わせると、周辺で出土した大皿など大型の陶磁器食器は、三十間長屋に収納されていたが、宝暦の大火で被災し、廃棄されたものと考えられる。

また玉泉院丸では、「鳥の餌入れ」として知られる製品が出土している。近世後期の絵図をみると、庭園整備に携わった露地役所の統きに、小鳥を飼育した「御鳥部屋」があったので、ここで用いられていたと考えられる。小鳥の飼育は近世後半になってたいへん流行し、愛好する藩主もいた。城勤めの多彩さを示す資料でもある。



御鳥部屋

「御城中丸分基絵図」（部分、加筆） 横山隆昭氏蔵

【庭園関連の出土品】

庭園の出土品は、普請・作事との繋がりも深いが、場所の特性を示し、露地役所の勤めとも関わるものとしてここで取り上げる。

玉泉院丸や本丸の庭園遺構では、石橋の橋脚の部材とみられる円柱状の製品、水鉢、灯籠部材、敷石などが出土した。いずれも原位置は保っていなかったが、園内の造営に供したものであろう。また意匠的な文様を線刻した瓦も、庭園内の建物を飾っていたと思われるもので、庭園ならではの出土品である。

【鐵と鉄砲部品】

軍事施設である城郭にも関わらず、武器の出土は意外に少ない。これは日常において、武器を簡単に廃棄できるような状況ではないことが大きく預かっている。数少ない事例の一つに、五十間長屋台出土の鉄製の鐵がある。二ノ丸の東辺を固める五十間長屋には、鉄砲が配備されていたことが史料にみえるが、鉄砲とともに弓矢も保管されていたことがうかがえる。文化5年（1808）の火災で被災し、回収に漏れたものだろうか。

三ノ丸北東部の発掘では、鉄砲（炮）所に付属する「細工所」の遺構の一部を確認した。遺構面では多数の火縄銃の部品や銃身の一部、鍛造片などが見つかった。火縄銃の部品の多くは真鍮製で、目当（照準）・火蓋・引金・内部のカラクリ・各種の鉄等多岐にわたる。

「細工所」は、本来は鉄砲の修理やメンテナンスを行った一角だったようであるが、出土した部品とその構成は、藩政末期、火縄銃から洋式銃への改造作業が行われたことを物語っている。通常なら回収されてしまうところ、何らかの理由でそのまま廃棄されたため、後世にその間の事情を伝えることになったのである。



池遺構（本丸北部）〔文8〕



菱櫓・五十間長屋・横爪門統櫓台〔文2〕



鉄砲所

「御城中毫分基絵図」（部分、加筆） 横山隆昭氏蔵



鉄砲部品等（鉄砲所）

城内の暮らし — 御殿と武家屋敷の出土品 —

寛永大火以前の本丸とその周辺 —

本丸一帯は築城初期に天守や御殿が置かれ、寛永8年(1631)の大火まで城郭の中核であった。確認調査の結果、元和6年(1620)の火災を契機に、御殿空間の拡大が図られたことが明らかになった。出土した陶磁器は小片ではあるが、城内の他の地点に比べて希少なものや上質なものが目立つ。



中国磁器 血等



ベトナム陶器 長胴瓶



中国陶器 天目茶碗・壺



信楽 壺

伊賀 壺



高取 壺・水指

103. 本丸出土陶磁器

本丸

中国やベトナム産陶器の壺や長胴瓶、信楽・伊賀・高取を産地とする国産陶器は、花生や水指など茶道具として使われた。



中国磁器 碗・皿・香炉



瀬戸・美濃陶器 織部
碗・向付・花入

104. 東ノ丸附段出土陶磁器

東ノ丸附段

寛永 8 年（1631）の大火で被災し、本丸側から
廃棄されたもの。細片が多いが、中国磁器五彩
皿などの優品がまとめて見られる。



105. 本丸附段出土陶磁器①

本丸附段

慶長年間（1596～1615）後半頃の陶磁器。大型で浅い器形の土師器皿（右上）は、京都の製品の影響を残す。儀礼的な宴の食膳具であるが、灯明皿としても利用された。



ごみ穴から出土した土器・陶磁器



106. 魚骨

本丸附段

慶長年間（1596～1615）後半頃のごみ穴に廃棄されていた魚骨。アラ、タラ、タイなどが検出されており、当時の食生活の一端を示す。

- (上から) 1列目：アラ
- 2列目：タラ（スケトウダラ・マダラなど）
- 3列目左：フサカサゴ
- 3列目右：サケ・マス類、フグ、コチ
- 4～5列目：タイ（マダイなど）



土師器皿



瀬戸・美濃陶器 皿・小杯



中国磁器 碗



107. 本丸附段出土陶磁器②

本丸附段

寛永8年(1631)大火頃の陶磁器。土師器皿は、京都の影響が薄れ、金沢地域独自の形態が流行する。まだ肥前磁器（伊万里焼）は流入していない。

把前陶器 碗・皿・鉢・壺鉢

城内の武家屋敷

◆陶磁器

河北門の発掘調査では、慶長後期に枠形が成立するまでの変遷過程が判明し、初期の門・通路と隣接する武家屋敷との境の溝から、多くの陶磁器が出土した。慶長頃から流行する肥前陶器が主体的に見られた。



瀬戸・美濃陶器
向付・碗・水指蓋



備前系陶器 鉢



軟質施釉陶器 茶入

中国磁器 碗・皿等



肥前陶器 碗・皿・鉢

108. 河北門下層出土陶磁器

河北門

慶長年間（1596～1615）後半頃。慶長頃から

肥前陶器が流行し、陶磁器の主体となる。

寛永 8 年（1631）の大火後に、二ノ丸に御殿が移された際、二ノ丸の東半分が盛土造成された。発掘調査で造成土の下（五十間長屋下層）から御殿以前に存在した武家屋敷地に伴う遺構が確認され、これらの遺構から陶磁器などの生活用具が多数出土している。



109. 五十間長屋下層出土陶磁器
五十間長屋
元和年間（1615～24）頃の陶磁器。
武家屋敷の存在が想定される。

◆小柄、煙管、渡来銭

五十間長屋下層の遺構からは、小柄や煙管、渡来銭などの金属製品もまとまって出土している。



110. 小柄

五十間長屋

細工用の小刀で、日本刀に付属する。左上の製品は、銅製で戸尻が丸みを帯び、素文である。右下の製品は、銅の本体に金・銀の合金や銀の薄板を被せて細工し、二頭の猪を表現している。



猪（拡大）



111. 煙管

五十間長屋

左上の製品は真鍮製で火皿～雁首。右上の製品は

真鍮製で羅字（煙を通す管）の前後に付随する肩。

下の製品は肩部を一体に作り出した吸口で、銅製。

羅字が一部遺存していた。



祥符元宝

元豐通寶



112. 銅錢

五十間長屋

北宋銭および明銭である（渡來銭）。

熙寧元宝

洪武通寶

◆漆器、下駄、木製人形

金沢城の出土木製品の多くが、二ノ丸内堀および五十間長屋下層から出土している。概して二ノ丸内堀出土資料は建築部材が中心であり、五十間長屋下層出土資料は生活用具の比率が高い傾向が見られる。



113. 漆器椀・皿

五十間長屋

内外面赤色漆が施されたものと内外面黒色漆で赤色漆が施されたものがある。内外面赤色漆の製品の下地は砂混り粘土で、内外面黒色漆の製品の下地は炭粉。樹種はケヤキ、トノキ、ブナ属等。



上面



下面



下面



上面



上面



下面

114. 下駄

五十間長屋

足を乗せる台と齒が一本で作られている連歛下駄である。左上のものは後の歯が別材で補修されていた。また、右のものは鼻緒の穴が前面に1箇所しか見られない。樹種はいずれもスギである。



人形



鎌形



舟形

火鎌棒・火鎌板



刀形

115. 木製人形等

五十間長屋

火鎌棒・火鎌板は、近世の段階では一般的な発火具ではなく、神事や儀礼的な場で用いられていたと推定されている。人形・舟形・鎌形は、遊び具だとしても信仰・習俗と強い関連性をもつと考えられる。

二ノ丸御殿と「部屋方」――

◆紅皿と段重

玉泉院丸（鼠多門）の調査で、明治17年（1884）の埋立土から、紅皿、段重といった、女性の利用が想定される遺物がまとめて出土した。これらは18～19世紀の肥前磁器が主体で、本来二ノ丸御殿で使用されていたものと考えられる。



紅皿（紅猪口・小碗）



段重・段重蓋

116. 紅皿（紅猪口・小碗）、段重

玉泉院丸

紅皿・紅猪口と呼ばれる器は、内面に化粧用の紅を塗りつけたもので、専用で作られたものだけでなく、小碗からの転用とみられるものがある。

段重は白粉を溶くための道具として使われたと考えられる器である。

◆土人形

土人形等土製玩具は、18世紀以降城下町の遺跡でよく見られる遺物であるが、城内では玉泉院丸からの出土に限られる。二ノ丸広式に居住した藩主の子女・側室等との関連が考えられよう。



117. ミニチュア土製品

玉泉院丸

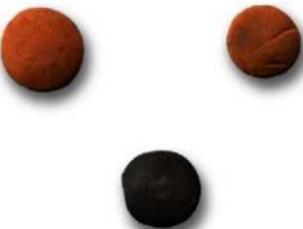
釜、蓋、土瓶、香炉などの器物が見られ、
型作り、型合わせで作られている。



118. 土人形

玉泉院丸

人物や動物などが型作り、型合わせ、
あるいは手づくりで作られている。
彩色が施されたものもある。



119. 墓石状土製品

玉泉院丸

径は2cm前後で、橙色の胎土と
黒色の胎土のものが見られる。



120. 円盤状土製品

玉泉院丸

独楽と考えられ、型作りで中央に穴があく。全面に
雲母粉が残っているものもある。出土した23点の
うち、10点以上が同范と見られる。

城内の勤め－役所などの出土品－

役所・番所の陶磁器

玉泉院丸には、庭園等の造営・管理に携わる露地役所などもあった。玉泉院丸の発掘調査では、役所の備品を廃棄したものとみられる陶磁器が出土している。出土した陶磁器は厚手の碗が多く、土器の火鉢類や陶器の土瓶等もよく見られる。



高台内の釘書「木」



高台内の釘書「木」



高台内の釘書「木」

121. 陶器 碗

玉泉院丸

肥前の陶胎染付碗で、いずれも高台内に「木」と釘書きされている。「木」と記されるのは、露地役所に詰めて庭園の維持管理を担った手木足軽に関連したものとみられる。なお、上・中段のものは法量や文様構成から揃いと考えられる。



高台側面の墨書（合成）
「御手木頭二十番之内カ」

高台内の墨書「木 十ノニカ」

122. 陶器 碗

玉泉院丸

萩の陶器で開口碗。高台内および側面に墨書きされており、側面の墨書きの「御手木」の文字から、露地役所に詰めて庭園の維持管理を担った手木足軽が使用したものと考えられる。



高台内の墨書「木口口」

123. 陶器 碗

玉泉院丸

トビガンナ文様が施された陶器の腰銷
茶碗で、高台内に墨書きされている。



124. 陶器 碗

玉泉院丸

京・信楽系の灰釉陶器で、高台内に「木」と墨書きされている。高台内中央部に付着した軸のため、その部分には墨が乗っていない。

高台内の墨書「木」



125. 陶器 碗

玉泉院丸

京・信楽系の陶器で、透明釉に口縁部内外に緑釉を重ね掛けるイトメ碗である。



126. 陶器 碗

玉泉院丸

在地の陶器碗で、高台内に「村松」と墨書きされている。

高台内の墨書「村松」



127. 土器 火鉢

玉泉院丸

口縁部墨塗り、胴部～底据にかけて赤彩・褐色漆塗りされる。外側面に菊花の印花文が施される。外底面に「御手木」と墨書きされており、手木足軽の使用品であることを示すと考えられる。



128. 陶器 土瓶

玉泉院丸

灰釉陶器で、体部外面は平行沈線を施した上に白泥を刷毛で縦に流し掛け、鉄絵で梅の花を描いている。



129. 陶器 土瓶蓋

玉泉院丸

山水土瓶の蓋である。白泥を塗った上に鉄絵と染付で文様が描かれる。

三十間長屋と御鳥部屋

◆陶磁器

本丸附段は、発掘調査によると、寛永8年（1631）の大火までは、御殿の生活を支える奥向きの一角だったとみられる。寛永大火後に御殿が二ノ丸に移されると、三十間長屋など数棟が建つばかりの広場となった。この頃建てられた初代の三十間長屋は、台所方の管轄で、宝暦9年（1759）の大火で焼失したが、周辺の発掘調査から出土した被災資料の多くが肥前磁器製品（大皿など）で、食膳具を保管していたことがうかがえる。



130. 磁器 大皿・皿

本丸附段

肥前磁器の染付および色絵の大皿と皿。
溶解した鉛瓦が釉薬状に付着したもの
も見られる。



131. 磁器 瓶

本丸附段

肥前磁器染付。溶解した鉛瓦
が釉薬状に付着している。



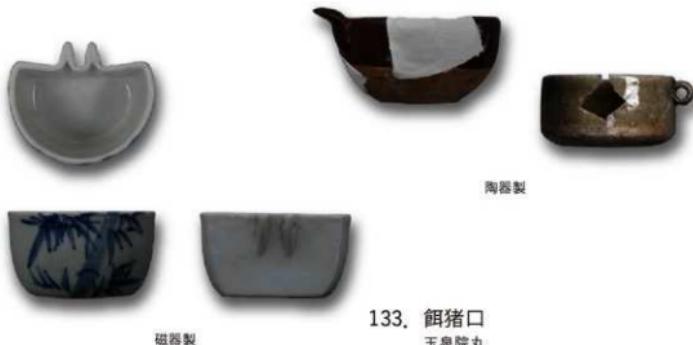
132. 陶器 鉢

本丸附段

いずれも肥前陶器である。

◆鳥の餌入れ

鳥の餌入れ（餌猪口）は、つまみ部を鳥籠のひごや止まり木などにかけて使ったと考えられ、絵図や文献に見える庭園の整備などに携わっていた玉泉院丸「御露地役所」の「御鳥部屋」で用いられたと考えられる。使用時期としては、いずれも 19 世紀代中葉、幕末に近い頃を想定している。



133. 餌猪口

玉泉院丸

陶器製のものには、口縁部付近につまみが 1 箇所付いている。磁器のものは平面半円形で、裏面には逆三角形のつまみが 2 箇所付く。

庭園関連の出土品 —

本丸と玉泉院丸の調査で、池跡など庭園に関する遺構が確認され、石造物や景石など、庭園で使用されたとみられる石材が出土した。石造物には、坪野石（溶結凝灰岩）が使用されている。坪野石製の石造物や石垣石材は、金沢城では庭園とその周辺に認められる。



本丸庭園 石造物・景石出土状況



134. 本丸庭園の石造物

本丸

円柱状のものは、一端に直方体の枘を持ち、枘が遺存する反対側は折損しており、石橋橋脚などの可能性がある。



玉泉院丸庭園 水鉢等出土状況



水鉢



灯籠中台



円柱状の石造物



敷石

135. 玉泉院丸庭園の石造物

玉泉院丸

水鉢は青戸室石製で、片口状を呈する。

灯籠中台は赤戸室石製で、上面と下面に枘穴が穿たれており、灯籠の竿や火袋を接続したものと考えられる。

円柱状の石造物は青戸室石製で、その一端に直方体の枘を持つ。枘が遺存する反対側は折損している。本丸の事例と同じく、石鶴橋脚などの可能性がある。

敷石は坪野石製で、ノミ痕跡を残す側面が3面あり、三角形の板状の形を呈していた可能性がある。



136. 線刻文様のある瓦

玉泉院丸

唐草文が陰刻されている。庭園内の建造物に使用されたと考えられる。

鎌と鉄砲部品

五十間長屋の調査では、長屋に保管されていた鎌が数点出土している。また、鉄砲所の発掘調査で、「細工所」に相当する箇所から、鉄砲鍛冶工房と考えられる遺構が検出され、洋式銃に改造する際廢棄された火縄銃の部品や、銃身の加工により生じた鍛造剥片などが多数出土しており、当時の緊迫した状況がうかがえる。

137. 鎌

五十間長屋

鉄製。出土した鎌は五十間長屋北半の上面から出土し、鰐頭形の同一形式である。文化5年（1808）の火災で被災し回収されなかつたものの可能性が高い。



138. 鉄

三ノ丸（鉄砲所）



139. 引金

三ノ丸（鉄砲所）

地方や流派によって様々な形状のものが作られている。



141. 綱鉄

三ノ丸（鉄砲所）

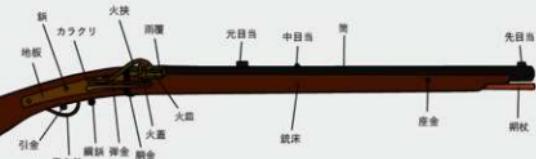
火縄を入れておくための環のついた鉄。



140. 用心金

三ノ丸（鉄砲所）

引金が不本意に動作しないための保護器具。引金の周りに付けられる。



火縄銃の各部の名称



ゼンマイバネ



弾金 (バネ)



142. 発射装置 (カラクリ) 部品

三ノ丸 (鉄砲所)



146. 火蓋

三ノ丸 (鉄砲所)

火皿を覆う安全装置。

145. 煙返し

三ノ丸 (鉄砲所)

雨覆に接着される部品。



元目当



先目当

147. 目当

三ノ丸 (鉄砲所)

標的を定める照準装置。銃身の手前側に設置されているものが元目当で、先端側のものを先目当という。



鉄砲所 錬冶関連遺構



143. 胴金

三ノ丸 (鉄砲所)

筒 (銃身) を台 (銃床) に固定する部品。



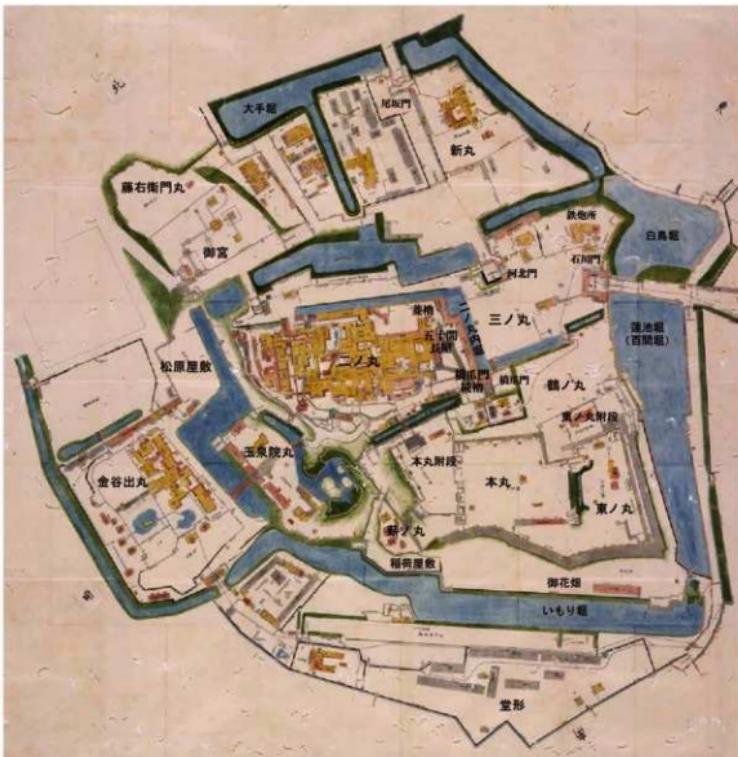
144. 雨覆

三ノ丸 (鉄砲所)

火皿に雨水の侵入を防ぐ部品。

148. 筒 (銃身)

三ノ丸 (鉄砲所)



「御城中屯分基絵図」(加筆) 横山昭氏蔵

文政13年(1830)

金沢城略年表

天正 8 1580	佐久間盛政が八幡城、土塁や堀を整備	宝暦 9 1759	宝暦の大火、城内の主要部が焼失
天正 11 1583	前田利家が八幡城 (以降前田家 14代の居城となる)	安永 元 1772	河北門の再建
天正 14 1586	天守造営	天明 8 1788	石川門の再建
文禄 元 1592	戸室石を採掘し、本格的に石垣築造を開始	文化 5 1808	二ノ丸御殿が焼失
慶長 7 1602	落雷により天守焼失	嘉永 元 1848	金沢城土蔵 (鶴丸倉庫) 造営
元和 6 1620	本丸焼失、翌年本丸を抜張し御殿を再建	安政 5 1858	三十間長屋を再建
寛永 8 1631	寛永の大火、城下から出火し城内も延焼	明治 4 1871	兵部省 (のちの陸軍省) に所管替え
	繩張りを改め、抜張した二ノ丸に御殿を建設	明治 14 1881	二ノ丸御殿焼失
寛永 9 1632	辰巳用水を開削し城内に引水	昭和 24 1949	金沢大学として利用
寛永 11 1634	玉泉院丸に庭園を造営	平成 8 1996	石川県が金沢大学跡地を取得、公園整備に着手
寛永 20 1643	城内に東照宮を造営	平成 13 2001	金沢城公園供用開始
寛文 2 1662 ～ 11 1671	城内各所で石垣修築 (長雨や地震による被災)	平成 20 2008	国史跡に指定

掲載資料一覧

No.	遺物	出土地点	寸法(cm)	報告書	開示番号
1	石造物 金沢大学資料館蔵	本丸、御宮	高44.0/20.7/14.0/17.0	38 写真20~23	
2	石造物	本丸附段	長14.6 幅14.8	14/S005	
3	石造物	慶裕	長20.3 幅19.1 厚15.6 深面孔6.5×7.5	5/S053	
4	火拂人骨	御手衛門丸		14	
5	新丸下層出土陶磁器	新丸	口徑13.2/10.0/14.0/22.0/11.4 底径4.4/6.8/7.2/6.6/5.2 他 口徑 細縁 高さ13.2 4.7 4.7/14.8 5.8 6.9/10.6 5.5 2.6	22 1~21-25~26~28 11/P119-121-123	
6	白鳥帽下層出土陶磁器	白鳥帽	口徑12.2 高さ28.8 他	34 20~24~30~32~33,Fig.305-1~3~4~10~12	
7	金属加工関連遺物	新丸、白鳥帽		22 34 Fig.328-1~5~6	
8	金箔瓦(軒丸瓦)	本丸附段、本丸南端	瓦当径4.3 他	2 T39~40 15/T462	
9	金箔瓦(軒平瓦)	本丸南端	下幅11.4 他	15/T465~467	
10	金箔瓦(鏡丸)	本丸南端	長12.65 幅9.4 厚9.6	15/T475	
11	金箔瓦(器種不明)	本丸南端		15/T477	
12	軒平瓦(軒瓦)	本丸附段、二ノ丸内堀、河北門、玉泉院丸、本丸南端	上弧幅12.5 他 長12.65 幅9.4 厚9.6 瓦当厚2.0 体部厚1.9 上弧幅15.3 下幅11.4 他	2 T89~91 3/T104 5/T145 10/T6 15/T465~T468 8/T004	
13	丸瓦	本丸附段、本丸南端	幅16.8	15/T479	
14	平瓦	本丸附段	長31.7 幅15.3	2/T189	
15	軒平瓦(三葉文)	本丸附段、河北門、石川門前土橋	長31.0 幅26.5	3/T82~84	
16	軒平瓦(花文)	本丸附段、河北門	長24.7 幅27.1/長19.0 幅28.1	14/T063	
17	軒瓦(瓦文)	本丸、本丸附段、河北門	上弧幅25.3 上弧幅24.8/1.弧幅18.2 他	33 Fig.62-5,141-2,142-2,143-3	
18	軒平瓦(重下型三葉文・五葉文)	玉泉院丸 石川門前土橋	長25.4 幅26.9	2/T96	
19	丸瓦	本丸附段	瓦当径12.3/16.6	3/T61~62~76	
20	平瓦	本丸附段	瓦当径12.7 他	2/T24~36	
21	軒丸瓦	玉泉院丸、石川門前土橋	瓦当径15.1 全長33.3 体部幅26.3 他	3/T38~43	
22	軒丸瓦 (公財)石川樹齋藏文化財センター蔵	東形	瓦当厚4.9	13/T091	
23	軒平瓦	本丸附段、玉泉院丸、いもり塗	瓦当厚4.5/5.0/4.7	33 Fig.62-11,144-1~7	
24	丸瓦	いもり塗	長27.9 14.6/33.1 16.4	2/T115~139	
25	丸瓦	二ノ丸内堀	長26.1 19.5/21.6 22.3/25.1 25.9	2/T170~179~185	
26	御灯(貝折打)	二ノ丸内堀	瓦当径17.0	17/2041	
27	鏡瓦	玉泉院丸	瓦当径17.0/18.0/17.5/16.4 他	29/T13~19~20~23~25	
28	鏡瓦	二ノ丸内堀	瓦当径17.7 他	33 Fig.61-1~2	
29	南風津波喰	玉泉院丸	瓦当径16.4/15.2/15.3/16.7		
30	軒丸瓦	いもり塗	上弧幅17.2 下幅25.5 他	15/T263~266	
31	軒平瓦	本丸附段、東ノ丸、河北門、御宮、いもり塗	長 幅29.4 26.5/25.95 26.2/30.75 26.0	2 T58~103 14/T051	
32	丸瓦	いもり塗	長27.7 幅17.4	15/T296	
33	丸瓦	いもり塗	長28.45 幅14.15	15/T291	
34	平瓦	本丸附段	長31.6 幅26.9	2/T191	
35	平瓦	いもり塗	長31.1 幅26.6	15/T313	
36	熨斗丸瓦	いもり塗	長30.1 幅14.8	15/T257	
37	鏡瓦・鳥糞	御宮	長48.3 高43.8 幅27.1 幅12.5	14/S006~007	
38	軒丸瓦	御宮	瓦当径15.55 幅14.3 幅2.85	14/S009	
39	軒丸瓦	御宮	瓦当径12.5 幅14.0	14/S010	
40	軒平瓦	御宮	上弧幅17.0 共17.0	14/S011	
41	軒丸瓦	御宮	長25.6 幅29.8	14/S012	
42	鏡瓦(質甲瓦)	御宮	小丸部13.7 長36.8~41.0 幅25.6	14/S008	
43	丸瓦	御宮	長47.2 幅14.5	14/S017	
44	丸瓦	御宮	長24.8 幅14.3	14/S038	
45	平瓦	御宮	長53.4 幅31.1	14/S045	
46	平瓦	御宮	長54.8 幅31.0	14/S042	
47	鏡瓦	御宮	長55.8 幅35.8	14/S064	
48	鏡瓦	御宮	長41.1 幅41.9	14/S065	

No.	遺物	出土地点	寸法(cm)	報告書 開幕番号
49	軒丸	御宮	長 幅:102.3 22.2/93.0 21.8	14 S071-074
50	軒丸瓦	東ノ丸附段	長17.2 幅16.8	2 M14
51	軒丸瓦	二ノ丸内側	瓦当径12.0	5 M061
52	軒丸瓦	いもり塀	長16.7 幅17.2	15 M010
53	鰐口	二ノ丸内側	長:2.5/2.3	5 M146-150
54	軒平瓦	河北門	上弧幅25.6 幅5.2 供端幅24.4	3 M1
55	軒平瓦	河北門	上弧幅24.0 幅5.3	3 M2
56	軒平瓦	いもり塀	長5.0 幅19.5 他	15 M014-016
57	軒丸瓦	二ノ丸内側、玉泉院丸	瓦当径16.1	5 T065
			瓦当径15.3	29 T49
			瓦当径16.1 幅28.6 幅16.0	30 T016
58	軒平瓦	玉泉院丸	長 幅:25.0 25.9/26.5 24.6 他	29 T97-99-103
59	軒平瓦	玉泉院丸	長26.5 幅25.4	29 T111
60	軒丸瓦	玉泉院丸	幅31.4	13 T219
61	軒丸瓦	御空	瓦当厚4.5	14 T048
62	軒丸瓦	玉泉院丸	長31.4	29 T133
63	軒平瓦、軒丸瓦	二ノ丸内側、玉泉院丸	小丸径8.9	5 T015
			長:25.5/28.3	13 T189-194
			長 幅:24.4 30.4/17.4 20.8	13 T025-026
64	軒丸瓦	本丸附段 三ノ丸 玉泉院丸	上弧幅25.0 幅25.8	14 T030
			長30.4 幅28.1	20 T24
				29 T135
65	丸瓦	本丸附段	長30.4 幅14.3	8 T024
66	平瓦	玉泉院丸	長31.2 幅25.4	13 T045
67	丸瓦	玉泉院丸	長31.1 幅30.5	13 T056
68	平瓦	玉泉院丸	長21.8 幅10.4	13 T029
69	谷丸瓦	玉泉院丸	長16~35 幅14.9	29 T153
70	合掌造い瓦	玉泉院丸	長40.1 幅31.2	13 T067
71	丸瓦	玉泉院丸	長25.8 幅28.6	30 T077
72	軒丸瓦	鰐口門	長29.2 幅23.7	9 T129
73	軒丸瓦	玉泉院丸	長25.3 幅23.3	29 T164
74	夷丸瓦	玉泉院丸	長23.7 幅11.5	29 T166
75	曲丸瓦	玉泉院丸	長10.9 幅22.9	30 T105
76	曲丸瓦	玉泉院丸	幅:11.6.2 高3.85	29 T161
77	袖丸瓦(輪邊)	玉泉院丸	長21.4 幅26.05	13 T075
78	袖丸瓦(輪邊)	玉泉院丸	長11.85 幅12.6	13 T076
79	大型雨棚	本丸南側	長474.3 幅29.0 厚33.5	15 W027
80	轆轤	二ノ丸内側	長70.6 幅28.4 厚28.9	5 W105
81	轆轤	二ノ丸内側	長92.4 幅18.1 厚19.3	5 W104
82	鰐口	二ノ丸内側、五十間長屋	長:14.5/5.3/10.8/8.3/7.7/13.9/8.5/5.5	5 M169-173-175-177-190-192-196
				M085-086-088-090-092-093-
				5095-106-109-110-112-114-146-150
83	鰐口	二ノ丸内側、五十間長屋	長:14.0/13.6/13.3/9.8/9.8/9.6/7.8/7.7/7.4/3.4/4.1/2.3/2.3	5 M208-211-225
84	銘	二ノ丸内側、斐拾	長 幅:63.7 18.8/21.4 6.2/16.7 5.6	5 M208-211-225
85	目隠	二ノ丸内側	長 幅:24.7 8.7/11.5 4.6	5 M226-242
86	食具	二ノ丸内側、五十間長屋、斐拾	長 幅:34.2 4.1 2.8/4.0 2.7 1.9/8.2 0.6 1.0 他	5 M78-083
87	釘頭(金沢大学資料館蔵)	二ノ丸		
		二ノ丸内側	柄長29.45 柄幅2.1 滲幅2.1 滲厚2.0	5 M053
88	刀劍	鰐口門鉄格	長24.2 幅2.7 厚2.4	5 M054
89	刀	五十間長屋	長15.5 幅4.0 厚2.7	5 M055
90	矢	斐拾	長:16.0 13.4/12.8 9.3	5 M312-319
91	敷金(17世紀後半)			
92	敷金(18世紀後半)	河北門	長 幅:7.6 3.1/7.3 3.8/7.4 19.0	3 M31-33-34
93	敷金(19世紀前半)	鰐口門鉄格	長 幅:23.7 7.4/20.8 8.5/23.5 8.5	5 M243-267-296
94	木製状器皿	鰐口門鉄格	長 幅:5.5 6.0/6.5/2.4 0.8/4.7 5.0 0.7	5 M323-325
95	柄鏡	二ノ丸内側	長19.5(柄長4.7) 幅径14.8	5 M007
96	寛永通宝	二ノ丸内側	径:2.5/2.4/2.5/2.3/2.3 厚0.1	5 M018-022
97	刀	二ノ丸内側	長60.4 刃長49.5 幅2.7 厚0.6	5 M038
98	切羽	二ノ丸内側	長 幅:4.0 2.4/4.0 2.3	5 M039-040
99	刀	二ノ丸内側	長74.6 幅3.8 厚2.2	5 M042
100	鋼筋鉄石	五十間長屋	11径15.0~16.0cm/15.0~16.5cm	5 S054-055
101	呪符墨書き土器	玉泉院丸	11径10.0 幅2.4	10 P147
102	五足鉢	玉泉院丸	長7.4 幅2.1 厚2.0	17 3604
103	本丸出土陶磁器	本丸	底径:7.2/12.6/8.8/7.11 他	5 P169-172-128-130~134-139-8 140-157-171~173-177~181-183-185-187
104	東ノ丸附段出土陶磁器	東ノ丸附段	13径 底径 : 11径22.0/11径12.7/11径24.4/底径12.4/底径12.8 他	2 P33-34-44-45-49-52-58-65-80-82-83-85
105	本丸附段出土陶磁器①	本丸附段	11径 底径 : 高12.0 4.6 5.8/16.1 10.5 3.1/10.1 6.7 2.8/13.6 10.3 2.9 他	2 P165~168-173-178-185
106	魚骨	本丸附段		2

No.	遺物	出土地点	寸法 (cm)	報告書	開航番号
107	本丸附段出土陶器蓋②	本丸附段	口径 底径 高さ: 6.9 3.2 4.1/12.7 9.2 2.7 他	2 P94-96-98~100-102~106- 115-133	
108	河北門下層出土陶器蓋	河北門	口径 底径 高さ: 11.3 5.0 6.3/11.6 4.5 4.1/12.6 7.1 2.7/10.5 3.4 2.6/10.8 4.0 5.5/11.1 4.0 6.3 他	3 P100-111-112-113-115-123- 145-148-162-168-174-183~ 185-188-192-219-238-240	
109	五十間長屋下層出土陶器蓋	五十間長屋	底径 14.8 底高 23.3/11径 7.8 壁厚 4.2 他 高 4.9 他	5 P277-285-286-294-295-299- 306-343-349-350	
110	小柄	五十間長屋	長 幅 高: 10.0 1.5 0.7/7.8 1.5 0.5	5 M044-046	
111	燈籠	五十間長屋	長 幅 3.5 1.7/2.1 1.0/16.6 1.3	5 M002-005-006	
112	胸鏡	五十間長屋	径 2.3/2.3 2.4/2.2 厚 0.1	5 M031-033-034-036	
113	漆器(椀・皿)	五十間長屋	長 幅 高: 11.5 5.0 3.4/24.5 15.4 2.3	5 W001-002-003-005~007	
114	下軒	五十間長屋	長 幅 高: 21.5 8.8 3.5/21.7 9.8 2.8/ 19.1 8.1 3.0	5 W026~028	
115	木製人形等	五十間長屋	長 幅 高: 20.0 2.0 1.5/20.3 5.4 16/22.5 9.0 1.4/30.2 2.8 1.0 他	5 W096~103	
116	軒瓦(虹彌11・小窓)、段重	玉泉院丸	口径 底径 高さ: 13.6 9.0 5.3/10.9 9.9 3.4/7.4 2.8 3.2/4.3 1.4 1.7	17 1237-1239~1241-1247-1255- 1271-1272-1274~1280	
117	ミニチュア土製品	玉泉院丸	口径 2.9 底径 1.7 壁厚 2.4	10 P163	
118	土人形	玉泉院丸	口径 4.1. 小さり口径 4.1. 壁高 1.95 他 高 5.8 幅 4.2 壁厚 4.0	10 P164	
119	碁石状土製品	玉泉院丸	幅 壁 高: 3.9 2.0 6.9/3.8 1.9 3.85	13 P204-205	
120	玉泉院丸	玉泉院丸	長 幅 3.0 5.3 3.8/5.2 5.6 5.5 他	30 P076-077-079~082-086~090	
121	陶器 瓢	玉泉院丸	長 幅 2.0 1.9/5.1 8.8/2.1/2.15	30 P091~093	
122	陶器 瓢	玉泉院丸	幅 3.4/3.7/3.7/4.8/4.7/4.9 他	30 P094~107	
123	陶器 瓢	玉泉院丸	口径 9.4 底径 6.3 壁高 4.3	10 P77-P89~115	
124	陶器 瓢	玉泉院丸	6.9/9.4 4.2 6.5		
125	陶器 瓢	玉泉院丸	口径 10.3 底径 8.8 壁高 5.8	10 P76	
126	陶器 瓢	玉泉院丸	口径 11.6 底径 9.7 壁高 6.1	10 P102	
127	土器 火鉢	玉泉院丸	口径 9.4 底径 3.5 壁高 5.4	10 P94	
128	陶器 土瓶	玉泉院丸	口径 9.5 底径 3.5 壁高 5.8	10 P119	
129	陶器 土瓶	玉泉院丸	口径 10.9 底径 4.4 壁高 5.8	10 P118	
130	陶器 土瓶	玉泉院丸	口径 16.8 底径 13.1 壁高 8.9	10 P130	
131	鐵器 旗	本丸附段	口径 11.9 底径 9.9 壁高 12.1	10 P15	
132	鐵器 旗	本丸附段	口径 11.0 底径 11.0 壁高 11.5	13 P089	
133	陶器 土瓶蓋	玉泉院丸	口径 6.8 大口径 6.8 つまみ径 1.9 壁高 3.55/11径 7.5 壁高 2.6	13 P066-123	
134	鐵器 大皿・盤	本丸附段	口径 底径 高さ: 14.3 8.8 3.0/20.8 13.9 3.5 他	2 P244-245-247-257-258	
135	鐵器 大皿・盤	本丸附段	高さ 6.5/底径 19.4/11径 46.2 底径 24.0 壁 高 10.6	14 P115-118-119	
136	鐵器 旗	本丸附段	口径 3.6	2 P271	
137	陶器 旗	本丸附段	口径 45.8/41.0 底径 14.2 壁高 14.7	2 P248-249 14 P163	
138	鐵器 旗	玉泉院丸	口径 6.7 旗高: 6.7 3.2 3.1×3.6/ 6.5(半円形) 4.6 3.6/6.0 4.4 3.1	10 P12-139-152	
139	鐵器 旗	玉泉院丸	長 幅 高: 27.2 20.05 19.9/10.25 14.1	8 S001-S004	
140	用心金	三ノ丸 (鉄砲所)	幅 9.5 壁 9.2 壁厚 0.7	20 M18	
141	胸鏡	三ノ丸 (鉄砲所)	(腰帶) 1.76(腰帶) 1.83 腰 0.6	20 M60	
142	免射装置 (カラクリ) 部品	三ノ丸 (鉄砲所)	幅 橫 高: 7.55 0.94 0.5/5.0 1.1 0.8/2.7 2.1 0.45 他	20 M67-72-75-87-97	
143	銅金	三ノ丸 (鉄砲所)	幅 5.4 橫 4.95 壁 1.15	20 M33	
144	雨覆	三ノ丸 (鉄砲所)	幅 橫 高: 8.4 0.25/6.35 1.7 0.5	20 M2-6	
145	營造	三ノ丸 (鉄砲所)	幅 2.3 橫 1.5 壁 0.4	20 M11	
146	火薬	三ノ丸 (鉄砲所)	幅 5.05 橫 1.78	20 M31	
147	目当	三ノ丸 (鉄砲所)	幅 橫 高: 1.6 1.45 1.2/1.27 1.2 1.3/ 1.14 1.0 0.64	20 M39-41-45	
148	筒(筒身)	三ノ丸 (鉄砲所)		20 M126	

参考文献

- (1)石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所2012「特別名勝兼六園 宋燈山石垣等修理工事報告書」
- (2)石川県金沢城調査研究所2008「金沢城御藏文化財確認調査報告書」
- (3)石川県金沢城調査研究所2011「金沢城跡一ノ丸内堀、菱櫓、五十間長屋、橋爪門駿府門」
- (4)石川県金沢城調査研究所2011「金沢城跡二ノ丸内堀、菱櫓、五十間長屋、橋爪門駿府門」
- (5)石川県金沢城調査研究所2012「金沢城跡二ノ丸内堀、菱櫓、五十間長屋、橋爪門駿府門」
- (6)石川県金沢城調査研究所2013「戸室石町1丁場確認調査報告書」
- (7)石川県金沢城調査研究所2014「金沢城跡一石川門付属大鼓築」
- (8)石川県金沢城調査研究所2014「金沢城御藏文化財確認調査報告書」
- (9)石川県金沢城調査研究所2015「金沢城跡一橋爪門」
- (10)石川県金沢城調査研究所2015「金沢城跡一玉泉院丸庭園」
- (11)石川県金沢城遺産明治所2016「金沢城跡一鶴見丸第1次・新丸第1次・尼坂門二ノ丸陣路・数寄屋屋敷」
- (12)石川県金沢城調査研究所2018「金沢城跡1号館調査報告書」
- (13)石川県金沢城調査研究所2018「金沢城跡一玉泉院丸庭園」
- (14)石川県金沢城調査研究所2019「金沢城跡一木舟町付北ノ丸」
- (15)石川県金沢城調査研究所2020「金沢城跡一もり堀」
- (16)石川県金沢城遺産明治所2020「金沢城跡一鼠多門・鼠多門跡」
- (17)石川県金沢城遺産明治所2021「金沢城跡一鼠多門・鼠多門跡」
- (18)石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2004「御造宮方日並記上巻」
- (19)石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2005「御造宮方日並記下巻」
- (20)石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006「金沢城跡」
- (21)石川県教育委員会1970「金沢城二ノ丸跡発掘調査概報」
- (22)石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002「金沢市金沢城跡」
- (23)石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002「金沢市前田氏(民種系)屋敷跡」
- (24)石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2003「珠洲市南黒九郎塚跡・南黒九郎塚跡」
- (25)石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2010「金沢市金沢城跡」
- (26)石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2012「金沢市金沢城跡2-堂形(第3-4次調査)」
- (27)石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2013「小松市八幡堀跡」
- (28)石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2014「金沢市金沢城跡3-堂形(第5次調査)」
- (29)石川県土木部公團地附地図・石川県金沢城調査研究所2010「金沢城跡石垣修理工事報告書・玉泉院丸南石垣等」
- (30)石川県土木部公團地附地図・石川県金沢城調査研究所2017「金沢城跡一玉泉院丸南石垣等」
- (31)石川県立埋蔵文化財センター1992「特別別附跡 兼六園(口印跡推定地)発掘調査報告-附 本多家上屋敷跡試掘調査報告」
- (32)石川県立埋蔵文化財センター1994「金沢城跡車櫓門発掘調査報告書」
- (33)石川県立埋蔵文化財センター1997「金沢城跡石門前土構(通称石川橋)発掘調査報告書」
- (34)石川県立埋蔵文化財センター1999「金沢城跡石門前土構(通称石川橋)発掘調査報告書」
- (35)井上紹夫1969「金沢城跡の発掘」金沢大学金沢城学術調査委員会
- (36)上野耕也1976「金沢城十四間堀周辺発掘調査報告」日本海文化No.3 金沢大学去文部日本海文化研究室
- (37)金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2005「石川県金沢市北坂跡(1丁目)II(古代・中世編・測量編2)」
- (38)金沢大学資料館・金沢大学埋蔵文化財調査センター・石川考古学研究会2011「令和3年度金沢大学資料館特別展 金沢大学と石川県の考古学-北陸人類学会から現在までの歩み-」
- (39)久保智康1992「近世後期南加賀における赤瓦の生産」福井考古学会誌10
- (40)佐々木達夫1980「金代鐵水の発掘一九七九年-」『日本海文化』No.7 金沢大学文学部日本海文化研究室
- (41)佐々木達夫1981「金沢城の発掘-1977年-」『金沢大学日本歴史研究所報告』第13号
- (42)吉永亮司・石崎俊哉・前田清剛1986「金沢城の発掘-1981-鶴右衛門丸北側法面裾部発掘報告」金沢大学日本海城研究所報告第18号
- (43)吉永亮司・前田清剛・児玉剛1989「金沢城の発掘-1986年-『照門北側外郭発掘報告』『日本海文化』No.5 金沢大学文学部日本海文化研究室
- (44)新修小松市史編集委員会2001「新修小松市史 資料編3 九谷焼と小松瓦」
- (45)出越茂と2006「金沢城五十間堀石垣最初に係る神具机について-金沢市波自加治神社所藏神具机裏書の調査-」『研究紀要 金沢城研究』第4号 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室
- (46)増山 仁1999「金沢城跡」金沢市史資料編19考古 金沢市史編さん委員会
- (47)三浦純夫・在田明子1994「金沢城本丸跡の石造遺物」資料部よりJ5 金沢大学資料館
- (48)三浦純夫1997「金沢城跡出土の石造遺物」資料部よりJ9 金沢大学資料館
- (49)吉岡康暢1985「金沢城の発掘」『金沢城と前田氏領内の諸城』日本城郭史研究叢書 第五巻 名著出版

金沢城史料叢書 44
石川県金沢城調査研究所設立 20 周年記念
金沢城出土品図録
—モノからみた金沢城—

令和 4 年 3 月 31 日発行
編集・発行：石川県金沢城調査研究所
〒920-0918 石川県金沢市尾山町 10-5
TEL 076-223-9696 FAX 076-223-9697
<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyouiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html>
E-mail kncastle@pref.ishikawa.lg.jp

印刷：前田印刷株式会社



石川県金沢城調査研究所